

2009年度 修士論文

イングランド・フットボールにおける  
担い手の変遷史における一考察

A Consideration about the History of Change of  
Shoulders in Modern English Football:

From a Trial in July 1991 and Related Arguments

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科  
スポーツ科学専攻 スポーツ文化研究領域

5008A056-9

宮内 亮吉

Miyauchi, Ryokichi

研究指導教員： 石井 昌幸 准教授

# イングランド・フットボールにおける担い手の変遷に関する一考察

## ～ 1991年7月裁判と関連する諸議論を中心に～

### 目次

序章	1
1. はじめに	2
2. 先行研究から見た本研究の位置付け	3
3. 本研究の構成	4
第一章 近現代イングランド・フットボール史の概説	6
1. 民俗フットボール	7
2. 教育機関におけるフットボール	10
3. F A、F Lの設立とクラブシーンの形成	13
4. 1960年代以降のフットボール	21
5. まとめ	36
第二章 1991年7月裁判と関連する諸議論の考察	38
1. 裁判の概要	39
2. 関連する諸議論の考察	46
3. まとめ	53
終章	54
1. おわりに	55
注釈一覧	56
参考文献一覧	59

## 序章

## 1. はじめに

フットボール（しばしばアソシエーション・フットボールは「サッカー」と表記されることがあるが、本研究では引用部を除いて「フットボール」という表記で統一する）の「母国」であるイングランド。そのイングランドにおいて現在行なわれているクラブシーン最高峰のリーグが、プレミア・リーグ（the Premier League、以下、引用部を除いてP Lと表記する）である。P Lは「メディア王」と称されるルパート・マードック（Rupert Murdoch）率いる世界屈指の規模を誇る複合メディア企業であるニュース・コーポレーション（News Corporation Ltd.）傘下の衛星放送会社BスカイB（BSkyB）による豊富なテレビ放映権料の分配金、そして世界各国の有力企業によるスポンサー料などに支えられた潤沢な資金力を背景としているが、その所属クラブチームもまた優秀なフットボール・プレイヤーを買い集めることで実力と魅力を兼備しており、その成績からは近年の国際トーナメントにおいても他国をリードする存在であると言える。いまや世界中で人気を博しているP Lの市場は、国際規模において拡大を遂げたのである。

しかし、その一方で問題視されているのは、行き過ぎた国際化とチケット価格の高騰である。ピッチ上における外国人のイングランド進出は、近年になってクラブチームのフロントにおいても散見されるようになった。そして、新たな血の流入によって実力を得たトップクラスのクラブチームにおいても、いざその試合を見てみるとピッチ上にイングランド人の選手が数えるほどしかいないというメンバー構成となっているケースがしばしば見られる。また、海外顧客やイングランド内でも中流階級以上の顧客を意識したP Lの運営のもとでチケット単価は高騰することとなり、長らく「庶民のスポーツ」と呼ばれてきたフットボールは、発祥の地においてその性格を変えつつある。

P Lは1992 - 93シーズンに開幕した、欧州や南米の各国もしくは地域におけるトップリーグの中では比較的新しいリーグである。しかし、実のところそれ以前のイングランド・フットボールには1世紀以上の歴史がある。その歴史とは、19世紀以前より行なわれていたフットボールが、様々な形で近代化されていく歴史である。現状において市場の拡張とともに商業的な成功を収めているように見えるP Lも、他の時代と同様にその歴史における大きなうねりの一部なのである。

そうした歴史の中で、フットボールの担い手もまた時代によって変遷していった。一般大衆がルールも人数制限もないフットボールを楽しんでいた時代、パブリック・スクールや大学で上流階級出身の子弟に対する紳士教育的側面において発展した時代、そして、イギリス社会における交通網の発展に伴って再び一般大衆がフットボールのプレイヤーとして名を連ねた時代。その時々において、フットボールをプレーする担い手と統括する担い手は変化していったのである。

この変遷史において、P Lの設立は大きな転換点の一つであったと考えられる。先述したP Lの国際化や高級志向によって、イングランド・フットボールは新たなステータスを

獲得すると同時に、それまで持ち得ていたイングランド独特のフットボール文化をいくらか失うこととなったからである。

PLの設立をイングランド・フットボールにおける担い手の変遷史上の出来事として考える上で、特に重要な局面がある。1991年7月に開かれたPL設立の是非を問う裁判 R v Football Association Ltd, ex parte Football League Ltd; Football League Ltd v Football Association Ltd と、この裁判に関連した諸議論である。この局面は、イングランド・フットボールの歴史が生み出したものであると捉えられる必要があるだろう。なぜなら裁判が開かれた法廷や議論が飛び交った新聞紙面上において、そのテーマは「PL設立の是非」という裁判の主たる争点の枠にとどまることなく、イングランド・フットボールが将来どうあるべきかについて広く問うものであったからである。

## 2. 先行研究から見た本研究の位置付け

さて、現代のイングランド・フットボールを取り扱った研究は、主に「フーリガニズム」と「スタジアム」という二つのテーマから論じられているものが多数を占める。

フーリガニズムに関する研究としては、池田好優らによる「英国におけるサッカー・フーリガニズムに関する研究( )( )( )」が挙げられる。三本の論文によって構成されているこの研究では、まず( )においてフーリガニズムの起源と歴史に焦点を絞り、フーリガンの発生および拡大の様相について、1960年代以前と1960年代～1980年代に時代を分けた上で検討を行なっている(1)。( )ではフーリガニズムの拡大に関する背景要因を、文化の変容、下位文化の構造、儀式としてのサッカー・バイオレンス、マス・メディアの影響という四つの観点から検討している(2)。そして( )では、1980年代に起こった三つの大惨事と、フーリガンに関連した報告書の中でも特に1990年に公表された The Hillsborough Stadium Disaster 15 April 1989: Final Report(通称「テイラー・レポート」)をテーマとして扱い、より具体的な検討を加えた上で「フーリガニズムはサッカーの商業化への反抗であるとも見ることもできる。物質社会において、経済的に裕福か、それとも心が豊かかという議論は時に難しい問題であるが、英国社会の伝統的道德を民衆が取り戻すことが最終的に必要なことと思われるのである」と結論付けている(3)。

スタジアムに関する研究としては、飯田義明の「イングランドにおけるプロ・サッカークラブのスタジアム変容に関する一考察」が挙げられる。この研究では、イングランドにおいてスタジアムが近代化され、クラブチームの資金調達場として利用されるに至ったその変容過程を、社会的背景から明らかにしている(4)。

また、吉田竜司は「テラスから 変貌するイギリスのサッカー観戦環境」の中で、イングランド・フットボールにおける観戦文化をフットボールのスタジアムにおけるスタンドの特徴やファンの行動を提示した上で、テイラー・レポートの公表以降におけるスタジア

ムの「全座席化」がもたらした功罪について考察を行なっている(5)。

以上のように、現代イングランド・フットボールをテーマとして扱った研究群には、1980年代から1990年代初期において起こったある特徴的な事象について考察した研究が数多く存在する。しかし、そうした研究がある一方で、同時期におけるイングランド・フットボールをその担い手に焦点を当てた上で歴史的観点から論じた研究は、管見ながら見当たらない。

よって、本研究は、P Lの設立という出来事およびその過程において起こった裁判と議論を、近代以降のイングランド・フットボールにおける担い手の変遷史の一部であると捉える歴史学的手法を用いて、現代イングランド・フットボールに起こった変化について論じる立場をとるものとする。

### 3. 本研究の構成

第一章では、一般大衆によってプレーされて各々の地域における有力者によって庇護される形態で行なわれていた民俗フットボール、パブリック・スクールや大学において上流階級出身者によって形成されたスクール・ゲームとしてのフットボールの発展過程、交通網の整備以降において国民的スポーツとしての道を歩み始めたフットボールのイングランド内における伝播、そして1960年代以降のイングランド・フットボール界において表面化したピッチの内外における諸問題を、「近現代のイングランド・フットボール史」として概観する。その際、フットボールにおけるプレイヤーと統括者が誰であったのかという構図に着目し、近代以降のイングランド・フットボールにおける担い手の変遷を追う。

第二章では、第一章において概観したイングランド・フットボール史上における転換点の一つとして、1991年7月に開かれたP Lの設立をめぐる裁判をテーマとして扱う。フットボール協会(the Football Association、以下、引用部を除いてF Aと表記する)によって下されたP L設立など三つの決定の違法性についてフットボール・リーグ(the Football League、以下、引用部を除いてF Lと表記する)が再審理を求めた同裁判の内容、および公聴期間と判決後において関係者、ジャーナリスト、フットボール・ファンから寄せられた様々な意見を、裁判記録および当時の新聞記事から抽出し、考察する。

その際に資料として用いる新聞は「ザ・タイムズ(The Times、以下、引用部を除いてタイムズと表記する)」、「ザ・ガーディアン(The Guardian、以下、引用部を除いてガーディアンと表記する)」、「デイリー・ミラー(Daily Mirror、以下、引用部を除いてデイリー・ミラーと表記する)」の三紙とした。タイムズとガーディアンはいずれもイギリスを代表する高級紙であり、前者が中道右派、後者が中道左派の報道姿勢をとっている。抽出される記事におけるバランスを保つために、この二紙を採用することとした。また、イギリ

スのスポーツ界におけるセンセーショナルなニュースがタブロイド紙から発せられるケースが少なくないことを考慮し、タブロイド紙であるデイリー・ミラーを資料として加えることにした。

また、対象とする新聞の発行期間については、裁判における公聴会初日（１９９１年７月２２日）の様子を報道する記事が各紙にて掲載された１９９１年７月２３日から、裁判に関する一連の議論が収束を見る１９９１年８月２２日までとした。この期間中に発行された上記三紙に掲載されている記事のうち、イングランド・フットボールに関する記事が考察の対象となる。

終章では、１９９１年７月裁判、関連する諸議論、そしてＰＬの設立が、第一章で概観したイングランド・フットボール史を背景として展開されたものであり、またイングランド・フットボールが将来進むべき道を問うものであったことを確認する。そして同時に、それらの出来事を考察する上で歴史学的視点をを用いることが有効な手段であることも、合わせて確認する。

## 第一章

### 近現代イングランド・フットボール史の概説



## 1. 民俗フットボール

池田らの「近代サッカーが形成される以前（19世紀以前）サッカーは、モブ・フットボールやマス・フットボールと呼ばれ、その民衆によるゲームは非常に暴力的なものであった」(1)という指摘や、アルフレッド・ヴァールによる「中世のボールゲームの代表的なものが、イングランドの『フットボール』やフランスの『スール』である。農村で古くからプレーされてきたこうした遊びは、（中略）明文化されたルールはなく、古くから伝わる決まりごとだけを頼りにプレーされており、参加者の数も試合時間にも制限がなかったし、試合をする場所の範囲も定められていなかった」(2)という記述から、中世において広く一般大衆の間で行なわれていたフットボールは、各々の土地が持つ伝統によってその趣を異にしており、各地において多種多様の、多くの人数が参加するフットボールが行なわれていたことが分かる。

なお、上記のようなフットボールについては、「スポーツ史家の多くは、このような民衆の間に広く普及していた初期のフットボール（十九世紀に現代のサッカーやラグビーが現われる以前のフットボール）のことを『民俗フットボール』という言葉で呼んでいる」(3)という山本浩の記述に則り、本研究では「民俗フットボール」と呼称する。

さて、阿部生雄によると「産業革命を経験する以前のイギリスの民衆スポーツは、地域性を持ち、農耕的、宗教的祭日や休日との結びつきからくる行事性や季節性を持っていた。産業革命以前の伝統的民衆スポーツは本質的に祭日スポーツ（*feast-day sport*）としての性格を持っていた」(4)という。そうした民衆スポーツのひとつである民俗フットボールの特徴について、後藤健生は以下のように指摘している。

チームは、例えば村と村、都市と都市といった地理的なグループ分けでもいいし、独身者対既婚者などといった社会的な区分けでもよかった。そして、相手の村の門、どこかの丘、あるいは大きなランドマーク的な樹の下でもいい、そこにボールを持ち込むことで勝敗が決せられた。チームのメンバーの数もとくに決まりがあるわけでもないし、（中略）ボールを運ぶ方法も、持って走る、投げる、蹴る、なんでもよかった。また、それを阻止する方法も決まりがあるわけではなかった。（中略）

そもそも、中世のフットボールが勝敗を争うことを目的としていると考えることがおかしいのだ。現代のフットボールがそうだからと言って、当時も「ボールを相手ゴールに入れること」を目的としていたと考えるのは、それこそ、歴史の後知恵というものだ。

中世のフットボールには戦術らしい戦術はなかった。ボールを持った男（女性でもいい）が、そのボールを直接ゴールの方向に進めずに、横あるいは後方にいるフリーの味方に渡すことによって、間接的に味方に有利な状況を作る。それが

戦術だ。中世のフットボールには、そういう意味での戦術はなかった。ボールを持ったら離さない。そして、ボールを一步でも前に（敵陣の方向に）進める。その結果、数十人もしくはそれ以上の男（または女）が、一かたまりになって、くんずほぐれつ、蹴り合ったり、殴り合ったりする。そういう状況が延々と続いていたはずだ。なにしろ、ゴールまでの距離も大きく、その間には、民家や畑、河川といった、数々の障害物があるわけで、そう簡単に決着がつくはずもなかった。

簡単に決着がついてしまっただけとはいけないのだ。ボールを奪い合うというのは仮の目的であって、それを達成するために、男（女）たちが、かたまって接触する。これが、この遊びの真の目的なのだ。中世の人々は、決して、勝つため（だけ）にフットボールをやっていたのではない。肉体的接触を楽しむ、祭りの一種なのだ。(5)

後藤の記述からは、民俗フットボールのプレイヤーが「民衆スポーツ」という名の通り一般大衆であったこと、民俗フットボールにおいて戦術やルールといった決まりごとが曖昧であったこと、そして、民俗フットボールが勝敗を決するための競技というよりはむしろ一種の祭りとして捉えられていたことを見て取ることができる。また、「街」という生活空間そのものがフィールドとなっていたという特徴もあったことから、当時の民俗フットボールにおけるプレイヤーと観客との境界線が、現在において普及しているアソシエーション・フットボールと比べて格段に曖昧であったとすることができるだろう。

また「ジェントルマンにとってこうした民衆スポーツへの参加や庇護は、族長義務の一つであり、同時に、共同体に融和と秩序を、自らに権威をもたらしてくれる機会でもあった」(6)という阿部の指摘からは、「一般大衆のプレーを支配者層が保護する」という民俗フットボールにおける基本的な構造を窺い知ることができる。

さて、大勢の人々がプレーに関与し、ルールが無い上に暴力的だった民俗フットボールは、しばしばそのフィールドとなった街中の建造物に損害を与えていたため、警察当局は各地において「フットボール禁止令」を度々発令していた。にもかかわらず、祝祭的な大衆文化として各地域に根付いていた民俗フットボールは、長期にわたって廃れることなく継続された(7)。

しかし、そうした状況にも終止符が打たれるときが訪れた。18世紀末から19世紀初頭にかけて、民衆スポーツと民俗フットボールは急速に廃れていったのである。その要因については、阿部の記述に詳しい。

産業化と都市化の動向の中で、こうした共同体的、祭日的な民衆スポーツは、その伝統的な型を侵食され始めた。農村共同体の漸次的崩壊、産業社会を志向する労働規律の強化、潜在化したピューリタニズムである福音主義の台頭、伝統的

休日に対する攻撃、悪徳や時間の浪費、飲酒や動物いじめを一掃しようとする不寛容な社会浄化のネットワークの整備、家庭的娯楽を重視して共同体規模の乱痴気騒ぎを忌避する個人主義の台頭、伝統的休日制度の崩壊と産業的休日制度への移行、といったものが伝統的民衆スポーツの基盤を蝕み始めた。

( 中略 )

かつて民衆スポーツは支配者にとって頼もしい存在でもあった。( 中略 )しかし、共同体規模の民衆スポーツは産業革命期に次第に衰微し始め、1844年には、「『フットボール』と称する動物的で嫌悪すべき見世物ほど我が町の尊厳を傷つけるものはない( 中略 )このバーバリズムの遺風は……いまやダービーの町の人々を特徴づける知性や進歩の精神とまったく相入れない」とされた。

( 中略 )

特に、民衆スポーツを「野蛮」、「低俗」、「放縦」、「無秩序」として攻撃し始めたのは、18世紀半ば頃から力を増した福音主義者達や社会改良家達であった。

( 中略 )民衆スポーツや娯楽に対するこうした一連の攻撃、抑圧や統制は、その一方で民衆を中産階級の道徳的標準である「レスpekタビリティ」に順応させ、彼らに健全で秩序あるレクリエーション習慣を植え付けようとする運動を伴った。

(8)

この記述において注視すべきは、民俗フットボールを含めた民衆スポーツの衰退が、社会的動向によってもたらされたという点である。イングランド、ひいてはイギリスという国全体の社会システムが転換期にあった当時において、かつて民俗フットボールを権威の保持手段として捉えていた有力者たちにとって代わり、産業化を志向する者や福音主義者が台頭したのである。規律を重んじる彼らが、確固たるルールもなくプレー内容も粗暴である民俗フットボールが有する危険性に対して態度を硬化させたことは、容易に想像できることである。

池田らも「民衆にとって『社会的共有物』の一つであったマス・フットボールは、資本主義的工業化、すなわち産業革命の進展によって、民衆の力を象徴していたこのゲームは急速に衰退したのである」(9)と記している。また、後藤は民俗フットボールの退廃の要因として「土地が囲い込まれることによって、フットボールの主戦場となっていた共有地がなくなってしまったといった社会的な事情」(10)を挙げている。

以上の記述を総合的に考えると、民俗フットボールのプレーを止めざるを得ない社会的なシステムの変革が起こった結果、支配者層の志向が変化し、またプレイヤーであった一般大衆の生活習慣自体も激変したことで、民俗フットボールは急速に退廃することになったと考えることができるだろう。

## 2. 教育機関におけるフットボール

各地域において行なわれていた民俗フットボールが、産業化などによって変化する社会システムにおいて急速に退廃する中、フットボールはパブリック・スクールで生徒たちによってプレーされるようになった。

パブリック・スクールにおけるフットボールのはじまりについて、山本は以下のように記述している。

いつごろ、どのようにしてパブリック・スクールでフットボールが行なわれるようになったのかは明確ではないが、十八世紀後半から十九世紀初めには、フットボールはパブリック・スクールの遊技となっていた。この頃、パブリック・スクールで行なわれていたフットボールは、プレーヤの人数は決まっておらず、整備されたルールはなく、そのうえかなり乱暴なもので、各地で行なわれていた民俗フットボールとそれほど変わるところはなかった。違いがあるとすれば、民俗フットボールが庶民の遊技、低い階級の民衆の遊技であったのに対して、パブリック・スクールのフットボールは上流階級の子弟によるということであった。

当時は、フットボールは徒弟をはじめとする低い階級の若者の遊技という観念があった。そのため、上流階級の子弟であるパブリック・スクールの生徒たちがフットボールをすることに対しては、パブリック・スクールの内部からいろいろと批判があった。

(中略)

しかしながら、十八世紀後半から十九世紀初めのパブリック・スクールでは、バトラー校長(筆者注: サミュエル・バトラー (Samuel Butler) 1798年から1836年まで38年間にわたってシュルーズベリー・スクールの校長を務めた教育者<sup>(11)</sup>)やイトンの卒業生が表明したようなフットボール蔑視、フットボール批判にもかかわらず、生徒たちのあいだでフットボールは熱心にプレーされていたのである。<sup>(12)</sup>

この記述からは、上流階級の子弟が通うパブリック・スクールにあっても、フットボールがプレーされるようになった初期におけるその内容が民俗フットボールと大差ないものであったこと、パブリック・スクール内において階級意識から来る批判の声が相次いでいたにもかかわらず、生徒の間においてフットボールがプレーされていた当時の状況を理解することができる。

さて、批判が浴びせられる状況下において、フットボールが時を経るにつれてパブリック・スクールにおける遊技として確立されていった理由は、大きく分けて二つ存在する。まず一つ目の理由は「パブリック・スクールではその教育システムの一環として、生徒

たちが自主的に『フットボール』のチームをつくり、運営する習慣があったから」(13)である。つまり、将来のイギリス社会におけるリーダーに育たんとする生徒たちに対して、パブリック・スクールがフットボールのチーム運営を課すことで、組織論およびリーダーの在り方を教育しようとしていたのである。

そしてもう一つの理由には、パブリック・スクールの発展過程や当時のパブリック・スクールにおける教師と生徒、および上級生と下級生との間における力関係が大きく影響している。ここで再び、山本の記述を引用する。

最初は貧しい家庭の子供たちを教育する学校として出発したパブリック・スクールは、しだいに授業料や寮費を支払うことのできる裕福な家庭の生徒を多く受け入れるようになり、十八世紀の後半には上流階級の子弟の学校になっていた。ところが、そこでの教育を受けもつ校長や教師は、上流階級の子弟である生徒たちよりも低い階級に属する人びとであった。そのために、生徒たちの教育やしつけに関して問題が生じるようになった。つまり、生徒たちは、自分たちよりも低い階級に属する校長や教師から指導されるのを嫌がり、彼らを見くびって馬鹿にし、その指導に従おうとしなかったのである。

(中略)

生徒たちの反抗事件や喧嘩に見られるように、十八世紀後半から十九世紀初めにかけてのパブリック・スクールには乱暴な雰囲気があり、フットボールもそのような雰囲気のなかで行なわれていた。当時のパブリック・スクールの生徒たちが行なうフットボールは、彼らのあいだの荒っぽい雰囲気を反映した暴力的な遊技だったのである。そして、フットボールはたんに暴力的であるだけでなく、いじめの手段にもなっていたのである。

当時のパブリック・スクールでは校長や教師が必ずしも適切に生徒をコントロールすることができなくなっていた。その結果、学校を事実上支配し牛耳っているのは校長や教師ではなく生徒たち、とりわけ年長の生徒たちという状況が生まれていた。

(中略)

当時のパブリック・スクールでは、力の強い上級生が力の弱い下級生を支配する弱肉強食の論理が大手を振ってまかり通っており、上級生は下級生を相手に日常的にいじめや乱暴な悪ふざけを行っていた。そのような状況で、フットボールは上級生が下級生に権力をふるうための一つの手段になっていたのである。

(14)

もっとも歴史の古いイングランドのパブリック・スクールであるウィンチェスター校が創立されたのは1382年のことであるが(15)、この記述からは、その後において教師と

生徒との間における階級の逆転現象が発生し、そのことが原因となってパブリック・スクール内部における力関係が破綻したことが分かる。そして、こうした当時の状況こそが、パブリック・スクールでフットボールが盛んにプレーされた二つ目の理由である。高学年の生徒が学校を牛耳る状況下において、生徒が自主的に運営していたフットボール活動は活発化し、またいじめのツールとしてのフットボールが確立されていったのである。

フットボールは、上記二つの理由からパブリック・スクールにおいて盛んにプレーされることになったのである。

しかし、1830年以降に産業革命が全盛期を迎えるとパブリック・スクールにも大きな変化が起こり、その影響でフットボールも変質した。ヴァールによると、社会の中で力を握り新たに台頭した企業家たちがパブリック・スクールの運営にも積極的にかかわるようになり、上級生が下級生を支配していたそれまでのシステムを廃止することで教師の権威を確立することに成功した。その結果として、下級生へのいじめはなくなり、学校の規律が守られるようになった。こうしたパブリック・スクール自体の改革によって、フットボールもまたルールに基づき人格形成に役立つような「スポーツ」を目指すようになったのである(16)。

このヴァールによる指摘から、産業革命によって新たにもたらされた商業的な秩序がパブリック・スクールにおける秩序の回復にも寄与していたことが分かる。産業革命は広く一般社会において多大なる影響を与えたが、フットボールが近代化する上においても少なからぬ影響を及ぼしていたのである。

また、後藤は「パブリック・スクールは、近代資本主義の推進者である地主階級、新興ブルジョワジー階級の子弟の教育を担った教育施設であり、それにふさわしく、フットボールも目的と手段を明確に意識し、ゴールをすること＝勝つことを目的にプレーされるようになったのだ」(17)と述べている。民俗フットボールと同様の荒々しいフットボールから、より戦術的に洗練されたフットボールへの移行が、この時期に進んでいたことを見取することができる。

こうして、パブリック・スクールにおけるフットボールは、各々の学校ごとにおいて明文化されたルールや戦術などの決まりごとを持ち合わせるようになり、競技としての熟度を増していったのである。

19世紀の半ばになると、フットボールはしだいにパブリック・スクール以外の場所においても行なわれるようになった。パブリック・スクールを卒業して大学に入学した者たちが、それまで親しんでいたフットボールを引き続き大学でもプレーして楽しむようになったのである(18)。

大学においてフットボールがプレーされ始めた初期の頃は、生徒たちが各々の母校のルールに則って他校出身の生徒とともにプレーをしていたが、そこにはルール上の衝突が発

生してスムーズさを欠くことになった。特に、イギリスにおいてオックスフォード大学と並ぶ二大権威であり、パブリック・スクールの卒業生を多く抱えるためにフットボールが盛んに行なわれていたケンブリッジ大学では、イートン校方式の支持者とラグビー校方式の支持者との間における対立が明瞭化した(19)。

1848年、こうした対立に妥協点を見出すための委員会がケンブリッジ大学内に設けられた。山本によると、トリニティ・コレッジにある一つの部屋で開かれたこの委員会は、イートン校、ハーロー校、ラグビー校、シュルーズベリー校といった有力なパブリック・スクール6校の卒業生2名ずつと、パブリック・スクールの卒業生ではない者2名の合計14名で構成されており、それぞれ自分の母校のルールを筆記して互いに示し、話し合いによってルールの調整を行なった。委員会は紛糾したが、パブリック・スクールの卒業生ではない委員のリードもあって、開始から約8時間後の「ケンブリッジ・ルール」作成によって決着を見た(20)。

ケンブリッジ・ルールについての詳細な説明は割愛するが、注目すべき点としてラグビー校の主張がほぼ取り入れられなかったことを挙げることができる。他校のルールと比べて突出して手を使う機会が多く、またゴールラインを通過する際に手でボールを抱えながら走り込むことを是とする「ランニングイン(Running in)」という極めて特殊なルールを持つというルール上の埋まらぬ溝があったことに加え、上流階級の出身者が多いイートン校やハーロー校の卒業生が、中流階級の子弟が比較的多いラグビー校の卒業生を格下とみなしていた階級差別も、その理由として挙げることができる(21)。

その後、ケンブリッジ・ルールは1856年と1863年の2度にわたって改訂されている。特に1863年の改訂版は、改訂から数カ月後に創立されるFAが策定する統一ルールの基となっている。すなわち、現在まで続くフットボールにおけるルールの基本が、このケンブリッジ・ルールなのである(22)。

### 3. FA、FLの設立とクラブシーンの形成

パブリック・スクールを経て大学を卒業した者、あるいはパブリック・スクール卒業後にそのまま社会人になった者の中には、社会人になってもフットボールを継続して楽しむことを望む者がいた。そして、彼らはフットボールを楽しむためにクラブチームを結成したのである(23)。こうして、イングランド・フットボール界におけるクラブシーンはスタートした。

クラブチームの成立過程と、その過程におけるプレイヤーの増加については、山本の記述を引用する。

パブリック・スクールを出て大学に入った学生たちが、パブリック・スクール時代に親しんでいたフットボールを大学でも楽しみたいと思ったのと同じように、

パブリック・スクールや大学を卒業して社会人になった者のなかには、社会に出てからも引き続きフットボールを楽しみたいと思う人たちがいた。これらの人たちは、同好の士を募ってクラブを組織し、適当な土地を入手してグラウンドをつくり、クラブ・ハウスを建てた。彼らはそのようにして、フットボールを楽しむための組織と場所を確保したのである。

クラブは、自分たちで用意したグラウンドでプレーを楽しみ、またクラブ・ハウスで仲間との社交の時間を楽しく過ごすことを可能にするものであった。もちろん、クラブの維持・運営のために要する費用は各々のメンバーが会費を納入して分担した。したがって、フットボールのクラブのメンバーは、ある程度の経済的負担に耐えられる人でなければならなかった。

(中略)

十九世紀後半になるとフットボールはパブリック・スクールや大学だけのものではなく、より広範囲な人びとのあいだへ普及していくようになるのである。とくに、この時期には鉄道をはじめとする交通機関が発達したこともあって、フットボールはパブリック・スクールや大学を卒業した者たちによってイングランド各地へ広められていき、各地の地方都市ではさまざまな種類の人びとによってフットボール・クラブがつくられるようになったのである。(24)

クラブシーンの最初期に存在したクラブチームの多くは、パブリック・スクールの卒業生が再び集まって設立した「オールド・スクール・ボーイズ (Old school boys)」と総称されるものであった。つまり、当時におけるフットボールのプレイヤーは依然として上流階級の子弟に限られていたということである。

しかし、発達途上にあった交通機関によって大学の卒業生たちがイングランドの全土に散らばったことによって各地においてクラブチームが形成されることとなり、それに伴って公園などの場所で自然発生的に作られたクラブチームも増加した。こうした状況から、フットボールはより広範囲で多くの人々にプレーされることになったのである(25)。

クラブチームの間で試合が行なわれるようになると、大学において論争が起こったときと同様に、統一されたルールの策定と統括団体の設立を求める声が大きくなった。この動きについては、「統一ルールを作るという動きは、もちろん直接的にはクラブチーム対抗の対外試合をするという目的があったからであるが、同時に全国標準化という当時の英国の社会的な動きの影響がある」(26)という後藤の指摘を留意する必要がある。先述した山本によるクラブシーンの拡大過程に関する記述においても交通機関の発展が大きな要因とされていることを考えると、当時の交通手段の劇的な発展がイングランドにおけるフットボールの普及にいかに関与したかを理解することができる。

そうした状況の中で、1863年10月26日、バーンズ・フットボールクラブの主将



だった E・C・モーリー (E.C.Morley) の呼びかけに応じた在ロンドン 11 クラブチームの代表者とチャーターハウス校代表の 1 名のオブサーバー、そして個人の関係者多数が集って会合が開かれた(27)。パブリック・スクール出身者が大部分のメンバーであった在ロンドンのクラブチームと、パブリック・スクールの代表者という会合の主たる顔ぶれには、クラブシーンの発展によってイングランド各地に様々な形態のクラブチームが設立されつつあった当時においてもなお、イングランド・フットボールにおける中枢的な機能を担っていたのは依然として上流階級出身者であったという当時の状況が、端的に表れているとすることができるだろう。

さて、山本の記述によると、この日の会議の中心議題は「フットボール競技を管理運営するルールをつくるために協会を設立すること」であった。この提案に対して、チャーターハウス校の代表者からは、他のパブリック・スクールの見解が不明のうちは賛成できないという意見が出されたが、投票の結果、F A の設立が決定したのである(28)。

後日、F A では次なるテーマとして新たな統ルールに関する議論がなされた。モーリーは、まずハッキングやボールを手にしながらのランニングインなど、ラグビー校が採用しているルールを含有した草案を提出したが、その後同じくモーリーが参考までに提示したケンブリッジ・ルールの方が会合参加者に好評であったため、統ルールはケンブリッジ・ルールを基とすることになった(29)。そして、12月8日の会議において、ハッキングやランニングインを認めないルールが正式な草案として定められたのである(30)。

F A 設立と統ルール制定の過程において無視できないことは、ラグビー校方式のフットボールとの決定的な別離がなされた点である。「会議に参加していたラグビー校の代表者は、手を使うことを禁止する新ルールの採用を拒否した。その後、手を使うことを認めるルールでプレーしつづけたクラブチームは1871年にラグビー・フットボール連盟を結成し、こうしてアソシエーション(協会式)・フットボール(略称、サッカー)とラグビー・フットボール(略称、ラグビー)は、別々のスポーツとなったのである」(31)というヴァールの記述が示す通り、フットボールとラグビーはこの時点において決定的に異なったスポーツとしての歩みを始めたのである。

F A の設立、そして統ルールの制定によって、イングランド各地に普及されたフットボールは、地域や社会、階級などを超えてより広範囲に親しまれることとなり、クラブシーンは拡大した。

フットボールの普及が進んだ19世紀後期において、クラブチームの成立過程は多種多様であった。ヴァールによると、同時期において設立されたクラブチームの多くは、強靱な肉体と精神を培う方法としてフットボールを取り入れた教会を基盤として誕生したものであり、1880年には当時活動していた全クラブチームのうち実に25パーセントが教会を基盤とするものであった。教会に次いでクラブチームの基盤となったのは、地域社会の重要な社交場であったパブであり、さらに1870年代からは、シェフィールドやバー

ミンガムといった都市において大企業を母体としたクラブチームが登場した。企業を母体としたクラブチームの組織形態としては、オーナーが設立したクラブチームよりも、労働者によって設立されたクラブチームのほうが多かったという(32)。

ヴァールの記述からは、この時期においてフットボールの新たな担い手として労働者階級の人々が台頭してきたことが分かる。中世において民俗フットボールのプレイヤーであった彼らは、時代の流れも相まって上流階級の人々に一度は取り上げられてしまったフットボールを、再びプレーすることになったのである。そして、彼らは民俗フットボールの時代において曖昧であったルールに則った上で、戦術を磨くことによって勝利を求めることをプレーの目的としたのである。

しかし、そうした労働者階級におけるフットボールの興隆に対して、F Aの主たるメンバーであった上流階級出身者たちは嫌悪感を示した。その理由について後藤は、F Aを作ったロンドンの上流階級出身者が形成するクラブチームは純粋なアマチュアの集団であり、十分な資産と余暇を持つ彼らは何の報酬も得ずに、そして練習などせずに余暇活動としてフットボールを楽しんでいたため、勝利を目的とする練習を嫌ったのだとしている(33)。

また、トニー・メイソンは当時の上流階級出身者たちが持っていたアマチュアリズム的なスポーツ観について、以下のように記している。

組織化されたスポーツが十九世紀後半に発展したとき、その発展は貴族的パブリックスクールから生まれた、競技者全員、さらには観戦者をも包摂しようとするスポーツマンシップの倫理にもとづくものであった。勝つことではなく、参加することが重要だった。とくにチームスポーツは、協力と犠牲の慣習を教え込むことによって、個々の参加者の人格を形成すべきものであった。個性の発揮は、集団の利益のためなら許されることだった。二〇世紀のもっとも頻繁に使われる成句にあるように、勝ち負けではなく、どのように競技したかが問題であった。(中略)プロ主義に反対する傾聴に値する理由のひとつとして、スポーツは労働のようになるべきではない、というのがある。労働は、勝つことや真剣さや利潤にかかわる。また、成功や激しい競争とかかわる。(中略)スポーツはそれらすべてからの解放であり、心身のレクリエーション、娯楽のひとつときであるとされていた。さらに現実には、スポーツはより重要な仕事をするために個人をより健康にした。

(中略)スポーツは男性の職業や商売となってはならず、自分の職業をやるための健康維持の助けになるべきである、ということである。(34)

後藤とメイソンの見解からは、スポーツをプレーすることに対する上流階級出身者の姿勢が、労働者階級出身者の勝利を求めるマインドとは相容れないものであったことが分か

る。

こうして、労働者階級のフットボール・プレイヤーたちはF Aと対峙する格好となったのだが、それでも彼らはあくまで勝利のためのフットボールを貫いた。その結果として、労働者階級のフットボール・プレイヤーの中には、プレーすること自体によって報酬を得る「プロ選手」が現われるようになった。

後藤の記述によると、当時のフットボール・プレイヤーの中でも貧しい労働者階級出身者は、練習や試合のために仕事を休むとその間の給与を失うことになってしまう状況にあった。そのため、クラブチームは休業中の給与を補償することになっていたのである。このシステムに加えて、クラブチームの戦力強化のために優秀な選手を引き抜いて彼らに金銭的な保証を与えたり、新しい職を提供したりすることもあった。そして、プレーすること自体に対して金銭が与えられるプレイヤーが現われるようになり、こうしてプロのフットボール・プレイヤーが誕生したとしている(35)。

「アマチュアとプロの対立は、ある意味ではスポーツの階級を超えた普及を意味したが、アマチュア規定から排除された人々は次第に反抗的な動きを示した」(36)という阿部の記述からも分かるように、「アマチュアリズムを掲げる上流階級が組織するF Aという統括団体と、相対するプロ志向を掲げる労働者階級」という構図は、1870年代から1880年代にかけて続くこととなったのである。

しかし、フットボールの歴史における「エリート支配」は、1883年に象徴的な形で終わりを告げるようになった。この年のF Aカップの決勝戦において、労働者階級のクラブチームであるブラックバーン・ローヴァーズが、名門パブリック・スクールのイートン校を打ち破ったのである(37)。

また、「F Aは1883年のF Aカップの準決勝と決勝の進出者に旅費を払う」(38)という阿部の記述からは、イングランド各地において急速に進むフットボールの大衆化とF Aという統括団体のイングランド全域における影響力の維持の双方を考慮した上で、労働者階級のフットボールを認める方向にシフトしているF Aの姿勢を見て取ることができる。1885年には、ついにF Aによるプロ選手の公認が行われ、「フットボールの選手はもはやジェントルマン・アマチュアである必要がなくなった」のである(39)。

そして、そのわずか3年後の1888年、イングランド北部のプロ・クラブチームによってF Lが設立されることとなった。設立に至った経緯については、後藤の記述を引用する。

プロとなったクラブは安定した収入を得なければならない。当時のクラブにとって主たる収入源は入場料だった。しかし、人気のあるF Aカップの試合には多

数の観客が集まったが、エキシビション・マッチでは、F Aカップほどの観客動員を期待できない。そして、ノックアウト式トーナメントであるF Aカップでは1回戦で敗れてしまったら、年に1試合しか試合がないことになる。

そこで、北部のプロ・クラブはF Aとは独自にフットボール・リーグを組織し、互いにホームアンドアウェーで優勝を争うことを決めた。これなら、年間のホームゲームの数はあらかじめ分かるから、予算を立てることもできる。こうして、1888年にホームアンドアウェーの勝ち点制で優勝を争うリーグ戦が始まった。

(40)

この記述からは、すでにアメリカ合衆国のスポーツ興業において成功を収めていたリーグ戦システムを新たに採用したF Lを設立することによって、クラブチームが入場料収入の増収を図った様子を見て取ることができる。

こうした労働者階級のフットボールにおける新たな動きについて、F Aは団体規模の維持という理由からしぶしぶ認めつつも、慎重な姿勢を崩すことはなかった。メイソンは以下のように記述している。

一八八〇年代中頃以降は、一流のサッカーはプロ化され、サッカーをより実用的で現実的なものと考え勝つことに強く執着していた労働者階級の選手　しばしば人びとが想起させられたように、勝つことは彼らの生計を成り立たせるが、急速に選手の大半を占めるようになった。しかし、そこでさえ、勝つためにプレーすることが支配的考えとは認められていなかった。それは、サッカーが他のスポーツと同様に、第二次世界大戦までとそれ以降も、スポーツマンシップの倫理に浸りサッカーの商業化を阻もうとしていたジェントルマンによって運営されていたという事実、一部は負っている。経営者への報酬、無制限な配当、自由な労働市場、スポンサーシップは、いずれも許されなかった。一流のサッカーは部分的にはひとつの事業であったかもしれないし、それを批判する者はサッカーにスポーツの名誉をまったくあたえようとはしなかったが、しかし、そのように運営されたのではなかった。権力、地位、ファンについての強迫観念、これらすべてがサッカークラブの経営者たちの動機づけにあずかったが、彼らは利潤追求者ではなく、判事と同様に無報酬の偉大なる公的保護者の地位にとどまった。しかし、彼らは必ずしもサッカー界ではそれほど敬意を払われなかったが、彼らは事業と同じようにはクラブを経営しはしなかった。彼らはしばしば失敗したあとでも、さらに投資をしたり、大きな損失をすることも少なからずあった。サッカーと事業、あるいはスポーツと事業は、別の領域のものであることが期待されていたわけではなかった。しかし、それぞれの領域は守られるべきものであると考えられており、スポーツ界では事業は優先されなかった。(41)

メイソンの指摘からは、北部の労働者階級出身者たちが中心となって設立したクラブチームが、さらなる安定した収入を求めてF Lを設立した後もなお、イングランド・フットボール界においてF Aのアマチュア志向が消えることは無かったということを理解することができる。

また、「F Aはロンドンに本拠を置くアマチュア・クラブの団体だったが、その下部団体であるフットボール・リーグ（F L）は北部に本拠を置くプロの団体だった。二つの団体の性格には、初めから大きな違いがあったのだ」（42）という後藤の指摘は、後述する約100年後の1980年代末期から1990年代初期におけるイングランド・フットボールの地殻変動を考える上で重要であり、イングランド・フットボール界に特有な二重構造を示すものであると言える。

フットボールの普及が本格化したことによって、1905年にはF Aの加盟クラブチーム数が1万を越え、1910年にはアマチュアの登録選手が30万人を数えるまでになっていた。フットボール・プレイヤーのほとんどは一般大衆となり、それとともにエリート選手は徐々に姿を消していったのである。しかし、そうした状況にあってもF Aや大多数のクラブチームを運営していたのは、相変わらず上流階級出身者であった（43）。

F A加盟クラブチーム数と登録選手数の増加は、当時においてフットボールがより多くの人々、特に労働者階級の人々に広く浸透していたことを示すものである。しかし一方で、その支配者層が依然として上流階級出身者で占められていたことも、同時に注視すべきことである。

また、競技の浸透という意味ではメディアにおける露出の増加も要因として見逃すことができない。阿部によると、18世紀末には「ザ・スポーツ・マガジン（The Sporting Magazine）」が、19世紀初頭には「ベルズ・ライフ・イン・ロンドン（Bell's life in London）」が精力的にスポーツを報道し、さらにはタイムズ、ガーディアン、「ザ・デイリー・テレグラフ（The Daily Telegraph）」といった各紙も、スポーツを報道するようになった。スポーツ報道に力を入れるタブロイド紙にも、「デイリー・メール（Daily Mail）」、「デイリー・イクスプレス（Daily Express）」、「デイリー・ミラー」など19世紀末から創刊されていたものが多い。また、1927年に英国放送会社（British Broadcasting Company）が英国放送協会（British Broadcasting Corporation、以下、引用部を除いてBBCと表記する）に組織替えされると、BBCはオックスフォード大学とケンブリッジ大学によるボートレースの対抗戦、テニスのウィンブルドン選手権、競馬のグランドナショナルやダービー、そしてフットボールのF Aカップ決勝戦などの実況放送に力を入れ始めた。こうして、スポーツは全国民の耳目を集める国民的行事となり始めたのである（44）。

こうしたメディア網との好相性が、情報の受け手である一般大衆の間におけるフットボール人気の拡大に貢献したことは間違いないだろう。そして、その効果は観客動員数にも

反映された。ヴァールによると、1871年に行なわれた第1回FAカップの決勝戦には2000人の観客が詰めかけたが、1888年にはその数が1万7000人になり、その後は1893年の4万5000人、1901年の11万人と激増したのである(45)。

またヴァールは「たくさんの試合に大勢の観客が殺到したため、収容人数の多いスタジアムが次々と建設された」(46)とも記述している。観客を多数詰め込むことができるように「テラス (terrace)」と通称される立見席が備えられている点が特徴的であるこの時期に建設されたスタジアムは、今後約100年にわたってイングランドのフットボールを見守ることとなる。

熱狂的な支持を集めるようになったフットボールのクラブチームは、以降長きにわたって、本拠とする地域コミュニティに深く根ざしたシンボルとしての性格を帯びた存在となった。19世紀末期から20世紀中期までにおけるクラブチームとファンとの関係を、池田らは以下のように記述している。

産業革命を達成した英国では、労使関係はうまくゆき、労働者はその生活に満足し、安定した労働者コミュニティを組織していたのである。実際に彼らが応援するチームは、コミュニティのシンボルであった。

コミュニティのテリトリーは明確で、応援しているチームもグラウンドもすべてその中の生活にしっかりと位置づけられていたのである。この労働者のコミュニティには、彼らの生活が自然に培ってきた慣習と道徳が存在していたのである。

1950年代まで、英国の労働者は明確なコミュニティを持っており、彼らは群衆ではなく、サッカー・ファンは生活世界の慣習と道徳に従う人々であった。この年代までに「サポーター」の一团同志のけんかの報告がなかったことは注目すべきであり、観客の数が多く警官の数が少なかったにもかかわらず、騒動はまれにしか起こらなかった。そして時おり起きた暴動は、通常、審判に対する不満と納得し難い敗戦の時に起こったものである。(47)

交通網の発展に伴ったフットボールの普及によって再びフットボールのプレイヤーとなった一般大衆であったが、彼らはクラブシーンの拡大過程において、フットボールへの関わり合いをより深いものとした。プレー人口がさらに増加したことに加えて、彼らはスペクテイター・スポーツとしてのフットボールの魅力に目覚めたのである。パブリック・スクールや大学においてフットボールを近代化させた上流階級出身者を上回るほど多くの庶民がフットボールに関わるようになったこの時期にこそ、フットボールは真の意味で国民的スポーツとしての道を歩むことになったと言って差し支えないだろう。

しかし、フットボール人気の拡大という好ましい状況の一方で、FAとFLというイン

グラウンド・フットボール界における二つの統括・運営団体が持つ理念の相違という側面もまた、たしかに存在していた。このフットボール理念における「ねじれ現象」は、第二章においてテーマとして扱う１９９１年７月に開かれた裁判と、それに関連する諸議論を呼ぶ一つの要因となったのである。

#### ４．１９６０年代以降のフットボール

しかし、１９６０年代になるとフットボール・ファンによる暴力行為が確認されるようになった。当時におけるフットボール関連のバイオレンスの内容について、池田らは以下のように記述している。

英国におけるサッカーのサポーターの間でのバイオレンスは、１９６０年代に入り、深刻な社会問題として政府、警察、その他の政府機関やマス・メディアによって確認されてきた。それは観客によるグラウンドへの侵入に続いて起こるものである。(中略) １９６０年代中頃、グラウンドへの侵入はエスカレートし、しばしばサポートしているチームの敗戦が濃くなってくると、ゲームを延期させる目的でグラウンドに侵入し、占領を企てていた。１９６０年初めに観客のこのような目的での侵入は考えられなかった。群衆のより攻撃的な形態と、ゲームの初めと後の野蛮行為の増加というのは、新聞報道による報告のみであった。その後、１９６９年までに、いくつかの公的な調査によって「フットボールの試合での群衆行為」が証明された。(48)

また、月嶋紘之は、１９６０年代におけるフットボール・ファンの応援スタイルを「ゴール裏の両区画において、個人のサポーターが一定の集団を形成し、チームの応援歌を合唱し、相手側のサポーターに対して野次を飛ばすもの」、または「相手側の区画に押しかけteいって、相手を区画から追い散らし、自らの存在を誇示するような光景」とするエリック・ダニング(Eric Dunning)の考察を紹介するとともに、スタジアムの外における騒動についても「サポーターの集団が小競り合いなどの頻発によって、多くの公共施設が器物損壊などの被害をこうむった」と言及している(49)。

二つの記述、さらに「サッカー競技場で発生するバイオレンスに『サッカー・フーリガニズム』という言葉がつけられ、英国の社会問題となってきたのもこの年代である」(50)という池田らの見解から、「フーリガン(Hooligan)」と呼ばれる一部のフットボール・ファンによる暴力行為である「フーリガニズム(Hooliganism)」が、１９６０年代からイングランド、ひいてはイギリスという国全体における社会問題となっていたことが分かる。

１９６０年代末のこうした状況に対する政府および各クラブチームの反応については、

飯田の記述に詳しい。

また60年代末からスタジアム犯罪が日常化してきた。そのため政府・大臣の諮問を受けたサッカー関係者は、報告内容を法的文書として提示した。その経緯として、まず1968年にスポーツ担当大臣デニス・ハウウェルの諮問を受け報告書が提出された。(中略)しかし、こうした勧告は実現されることはなかった。なぜなら最終的に適切な安全性の基準は各々のクラブの自主的な判断でなされることとなったためである。各クラブはスタジアムを改修するための資金がないため、スタジアムは旧態依然としたままで改修されることはなかった。(51)

この記述からは、政府が当時の状況を危惧して勧告を行なったものの、その内容が徹底されることはなく、またフットボールの現場における怠惰な姿勢もあって危機管理のシステムが効果的に機能していなかったことが分かる。

1970年代において、フーリガニズムはさらに拡大した。

拡大の背景には、「スキンヘッド (skinhead)」と呼ばれる者たちの存在が挙げられる。スキンヘッドと1970年代のフーリガニズムの概要について、池田らは以下のように記述している。

1968 - 9年のサッカー・シーズンのスタートにおいてイースト・エンドに出現したスキンヘッドは、最初は彼らに関する報道のルポルタージュをぼんやりさせるのが目的であり、実際に、その期間の刺激的で過激な報道というのは矛盾したものを伝えていた。しかし、サッカーの試合での群衆行為の発達(展開)において、このスキンヘッドの出現というのは、1960年代に発生したサッカー・バイオレンスとは異なり、新しい段階に入ったことを示すものであったと考えられる。特にスキンヘッドは、第一の目的がフットボール・スタジアムで「エンドをとる」ことを目的とする若いサポーター「ファイティング・ギャング」の中心にいられている。一般のサポーターのための立見席であったところは、この時期に、ゲームの開始からその間のライバルサポーターとけんかする占領の場所を超えた「テリトリー」へと変わってきていたのである。(52)

引用文中にある「新しい段階」について池田らは、フーリガニズムが「サポーター同士のけんか、グラウンドへの侵入、競技場までの器物や公共施設への破壊行為へと拡大していった」こと、「スキンヘッドによってサッカー・フーリガニズムに人種主義的な内容が含まれるようになり、自然発生的であったものから組織的なものへとになっていき、1つの騒動が多くの民衆を巻き込む暴動へと変わってきた」ことを挙げている(53)。



「新しい段階」に突入したフーリガニズムの猛威を受けて、一般のフットボール・ファンの間ではスタジアム離れが起こるようになった。その危険性について、池田らは以下のように述べている。

1970年代後半には、サッカーの試合を見に（サポートする）行くことは、地方の労働者階級集団自身の重要なセクションの至る所で、恐れと不安を伴う出来事となってきていたのである。サッカー・グラウンドを囲む労働者階級地域においても、サッカーの試合に伴うバイオレンスが地方のパブやストアーに大きな被害を与えるようになったのである。それは、サッカー・グラウンドの郊外でもフーリガニズムが発生するということが一般化されたことを意味している。労働者階級のサッカー・サポーターは、落ち着いてアウェイゲームへ行こうと思うことさえできなくなっていた。それは、アウェイのサポーターがリーグの試合（特に人気のエンド）へ行ってみることに安全性というのは、警察の護衛なしには保たれないと考えるようになったからである。(54)

以上のような資料の数々が示す通り、スキンヘッドによる「エンドを取る（占領する）」という行為が、1970年代イングランドのフーリガニズムにおける暴力性を高めた一因であることは間違いないだろう。

このような状況に対応するべく、警察やクラブチームはスタジアムにおける観客席の区画を細分化するなどして治安の強化を図った。もともと観客を多く詰め込むために設置されたテラスが、フーリガンの主な行動領域となっていたからである。しかし、それらの対策は、意図とは裏腹に新たな暴力の苗床を作ることになってしまったのである。警察およびクラブチームによる対策とフーリガニズムの新たな動きについて、月嶋は以下のように指摘している。

まず、多くのクラブチームが着手した対策とは、スタジアムの観客席の区画を細分化することであった。それぞれの区画は、高い金網のフェンスによって仕切られ、スタジアム内部における観客の自由な移動は制限された。金網フェンスの突破を防ぐために、区画ごとに多数の警察官が配備された。

「フーリガン」対策の組織化は、スタジアムの外部にまで及んだ。スポーツ・カウンシル（Sports Council）が1978年に発表した報告書には、当時の「フーリガン」対策が詳細に述べられている。「フーリガン」対策に関する具体的な話し合いは、試合開催日の約一週間前から始められる。試合の重要度や、過去に報告された事件の記録をもとに、試合の規模に妥当な警備体制がシミュレートされる。それに基づいて、警察官の動員数や配置ポイント、およびアウェイ・サポーターの誘導路の確保などが決定されていく。特に、地元のサポーターとアウェイ・

サポーターは徹底して隔離されていた。(中略)

しかしながら、警察側による取り締まりの組織化は、「フーリガン」の組織化へと繋がっていくこととなった。つまり、警察側が繰り出す戦略的な取り締まりに対して、警備体制の抜け穴を探し出そうとする「フーリガン」が現われるようになったのである。ひとつの組織に対抗するための、組織の形成である。それが、1970年代後半から1980年代にかけて現われるようになった、「ファーム」(Farm)と呼ばれる集団である。「ファーム」とは、フットボールを観戦することよりもむしろ、「ファーム」同士の暴力を主な目的とする、「フーリガン」の一集団を指す。(55)

月嶋の記述からは、フーリガニズムの新たな形態を生みだした原因が、皮肉にもその拡大を阻止しようと、クラブチームと警察によって打ち出された対策にあったことが分かる。

また、池田らも「1970年代のスタンドの改築や治安の悪化が占領地域の境界線をさらに明確なものとしたと考えられる。この結果として、ファンの集団に対する帰属意識と結束が増大し、ファン集団内の社会集団づくりの度が増したのである。『エンド』は、彼らの社会集団づくりの場であり、グループは各々決まった場所を持つようになる」(56)と指摘している。

以上に挙げた指摘の数々は、フットボールにおけるフーリガニズム拡大の原因を、俗に「英国病」と呼ばれる経済と社会の停滞のみに求める短絡的な見解に対して懐疑の目を向けることの重要性を思い出させてくれるものである。そして同時に、的を外し続けたクラブチームと政府による対応の杜撰さについても十分な注意を払う必要があることも示している。

拡大するフーリガニズムは、19世紀末期から20世紀初頭にかけて建設された多くのスタジアムの老朽化と相まって、1980年代においてついに大事件へと発展した。1985年5月に発生した二つの事件・事故は、イングランド・フットボール界が抱える大きな問題を国内外に発信するものであった。

1985年5月11日、「ブラッドフォードの火災事故」が発生した。

池田らによると、F.Lディヴィジョン3の優勝を決定した後のブラッドフォードのホームゲーム最終戦であったリンカーン・シティを迎えての試合中に事故は発生した。ハーフタイム直前、スタジアムの木造スタンドから煙が出て突然燃え上がり、炎は約4分間でおよそ2000人の観客がいたメインスタンド全体に広がった。スタンドは6、7分でグラウンドへ焼け落ち、数百人のファンはスタンドからテラスを通過してフィールドへ逃げて助かったものの、スタンド後部のゲートへ逃げた57人は、ゲートに鍵がかかっていたために逃げるができず、死亡した。ゲートが施錠状態にあったことが、事故の被害を大き

くしたと伝えられている(57)。

また、後藤は大惨事の舞台となったヴァレー・パレード・スタジアムの建築物としての脆弱性について、メインスタンドが77年前に建てられたものでこの試合の後に解体される予定であったこと、ヴァレー・パレード・スタジアムがイングランドにおけるフットボール・スタジアムの中でも最も古いものの一つであり、完成直後の1888年にリーグ・ラグビーの試合において、イングランドで初めての観客死亡事故を起こしたスタジアムであったことを指摘している(58)。

池田らと後藤の記述から、あくまで一つのスタジアムの事例であることを考慮に入れるべきではありながらも、緊急災害時においてゲートが施錠されたままであった点については、当時のイングランド・フットボールにおけるスタジアム警備体制の不徹底ぶりを端的に表している事例であると言えることができるだろう。また、政府による安全性向上のためのスタジアム改修勧告が実践に移されていなかったことも、同時に見て取ることができる。

そして、「ブラッドフォードの火災事故」からわずか18日後の1985年5月29日、イングランドにおけるフーリガニズムの脅威を広く世界に知らしめることとなった「ヘイゼルの悲劇」と通称される事件が、ベルギーで発生した。事件の概要について、池田らの記述を引用する。

ブラッドフォード火災の3週間後、1970年代から80年代にかけて英国サッカーで最も人気があり、成功したチームの一つであるリバプールが、ベルギーのブリュッセル・ヘイゼル・スタジアムでのヨーロッパ・カップ決勝で、同様に有名なイタリア・リーグ・チャンピオン、ユベントスと対戦した。このゲーム開始直前に惨事は起きたのである。

試合前日、リバプールファン約一万人は、特別列車5本、飛行機のチャーター10便、さらに数百台の車でブリュッセルに乗り込んでいたのである。同様にトリノからもほぼ同数のユベントスファンが、バス28台、飛行機6便をチャーターして駆けつけていた。リバプールのファンは、英国政府がフーリガンの暴動を未然に防ぐために、アルコールの販売を禁止していたため、禁酒状態であった。ブリュッセルに着いてからは、その状態からとき放たれたリバプールファンは町へくりだし、赤と白のリバプールのチームカラーを身につけた一団は、深夜まで騒ぎ、宝石店を荒らすなどの乱暴を働き、けんか、麻薬保持、酒酔いのために15人の英国人が留置されていたのである。

英国サッカー・ファンの乱暴に対して厳しい態度を取っているサッチャー政府は、今回のヨーロッパカップ決勝戦でのファンの衝突を懸念して、ベルギー政府に、マクファーレンスポーツ担当相が書簡を送り、両チームのファンをしっかりと分離することや、英国からベルギーへ向かうファンへの警察の規制実施を事前

に要請していた。しかし、警備体制の手薄なベルギーでは限界もあり、外国遠征するほどに熱狂的なライバル・サポーターをフェンスで分離する処置がとられ、両ゴールネット裏の安価な立見席の「テラス」をリバプール側とユベントス側に指定したのである。テラスには緩衝地帯が設けられ、そこは、ベルギーや他の中立国のファンが入った。しかし、この試合の切符の多くは自由販売され、そのテラスも定員を大きくオーバーする超過密状態になっていた。ゲームが始まる少し前に、数百人のリバプールファンがテラスの一方で、ユベントスファンから分離するためのフェンスを破り、「エンド」を奪うという儀式を行うためにユベントスファンの方へ突進を始めた。「地獄絵のパニック」という見出しが付けられたその出来事は、死者38人、負傷者425人を生む大惨事となったのである。(59)

この記述からは、イギリスとベルギーの両国政府が持っていたフリーガニズムの脅威に対する危機感の温度差を窺い知ることができる。つまり、ブリュッセルにおいてリバプールのサポーターを抑圧から解放へと向かわせた原因が、当地到着まで禁酒状態を強いたことでただでさえ暴力的なフリーガンを「飢えさせた」イギリス政府の厳しい警備体制とベルギー政府による手薄な警備体制との差異にあったということである。

上記二つの事故および事件の後における政府の対応は、従来よりもさらに直接的なものとなった。これまでの施策が機能していなかったことに加えて、当時のイギリス首相であったマーガレット・サッチャー (Margaret Thatcher) による「対フリーガニズム」のキャンペーンを、国内外においてより強調するためである。

「ブラッドフォードの火災事故」直後、イギリス政府はポップルウェル高裁判事 (Justice Popplewell) を長とする事故究明委員会を設置し、スタジアムの安全性を考えたフットボール関連の財政見直しを実施することを発表した(60)。こうした対応の背景について、池田らは興味深い指摘をしている。

火災の直後に、なぜこの Popplewell 調査がサッチャー首相を始めとする何人かの権威主義者に受け入れられたのかということには理由があった。その期間の新聞報道は、調査がサッカー・グラウンドでの群衆の安全の論議を、サッカー・フリーガニズムの問題に関連付けようという意図で進められたものであるということを示唆していた。5月14日の新聞報道では、調査によって火災は、“Ointment”ギャングと呼ばれるメンバーの発煙弾投入が原因で発生したと報じられた。この後、5月16日付新聞で警察は、他の証言によってこの火災は、煙草による出火であることを認めたと伝えられたのである。しかし調査は、この新たな証言にも関わらず、サッカー・フリーガニズムに関連付けて進められたのである。この理由の一つは、この調査がブラッドフォードの火災と同じ日に起き

たバーミンガム・シティとリーズ・ユナイテッドのファンの間の騒動をも含めて作成されたものであるということ、そしてもう一つは、ブラッドフォードの火災が、サッチャー首相の「法と秩序」の再確認という公約の一部として、サッカー・フリーガニズムの問題への対処を取り上げた矢先に起こったというところにある。(61)

この指摘から、ポップルウェルらによる調査の内容が、「ブラッドフォードの火災事故」を何としてもフリーガニズムと結び付けようとしたサッチャー率いるイギリス政府の意思を反映したものであったことが分かる。

また、「ヘイゼルの悲劇」の直後におけるサッチャーの対応も、より厳格なものであった。池田らによれば、サッチャーは事件が発生した日の夜に「事件に責任を負うべき人たちの行動は、英国とサッカーに対し恥辱と不名誉をもたらした」との声明を発表し、F A のバート・ミリチップ会長 ( Bert Millichip ) に対しては、イングランドのフットボール・クラブチームが少なくとも2年間、全ての欧州ト・ナメント出場を辞退するように指示したのである(62)。

さらには、サッチャーがフリーガンの排除を自らの政策に盛り込み「フリーガンに対する戦争 ( A new Attack on Hooliganism ) 」をキャッチフレーズとして掲げていたこと、各閣僚がフリーガン問題に対して相当の危機感と焦燥感を感じて対策の具体化に躍起になっていたこと、「なぜ事件が発生したのか」よりも、「どのようにしてフリーガンを封じ込めるのか」という議論に多くの時間と労力が費やされていたことを指摘した月嶋による記述からも、サッチャーがいかにフリーガニズムを「敵」として意識しているかを見て取ることができる(63)。

1985年5月に起こった二つの事件・事故は、従来に比べて大胆な政治介入を行なう機会になったという意味でも、イングランド・フットボール史における大きな出来事であったと言えるだろう。そして、そうした積極的な政治介入の背景には、サッチャーが首相に就任した1979年以降における危機的な経済情勢とそれに伴う生活水準の低下が事件・事故の原因の一つとなっていたことに対する国民の注意を逸らすという政府の意図があったことも、見逃すことができないだろう。

二つの衝撃的な事件・事故から4年後の1989年4月15日、今日においてもイングランド・フットボール史上最悪と言われ「ヒルズボロの悲劇」と通称される事故が発生した。事故の概要について、吉田の記述を引用する。

1989年4月15日、イングランド中部の小都市、シェフィールドのクラブチーム、シェフィールド・ウェンズデイFCの本拠地ヒルズボロ・スタジアムで

おこなわれた、リバプールＦＣ対ノッティンガム・フォレストＦＣのＦＡカップ準決勝戦で、イギリスにおけるサッカー史上最も多くの死者を出した群集パニック事件が生じた。そしてこの事件が、のちにイギリスサッカー界の様相を一変させる引き金となる。

この日の試合は、両チームの本拠地からほぼ等距離にあるシェフィールドでの開催となったため、双方にとっていわばアウェイゲームであった。したがって、双方のサポーターが遠路駆けつける格好になったわけだが、間の悪いことに、この日、シェフィールドに向かう高速道路が工事の関係で大渋滞となっていた。そしてこのことが、のちに起こる悲劇の間接的要因ともなった。試合開始間際になっても両チームのサポーターが続々と詰めかけ、スタジアム周辺は入場を待つ人びとで溢れかえらんばかりに混雑したのである。とりわけリバプール側ゴール裏の立ち見用スタンド（Leppings Lane terrace）では、試合開始の１５分前には設計収容人数の２倍以上ものリバプール・サポーターですし詰めになっていたにもかかわらず、スタジアムの外では未だ入場を待つ人々が後から後から押し寄せるような状態であった。しかし場外警備を担当していた南ヨークシャー警察は、こうした状況にもかかわらずテラスへ通じる入場ゲートを開放し続けた。その結果、ついに試合開始と同時に悲劇は起こった。テラス内の人びとの圧力が限界を超え、たんに入場しようとしただけの人びとの集合的な圧力によって、じつに９６人（うち１人は４年後に死亡）が、スタンドとピッチを隔てていた防護フェンスの狭間で圧死したのである。（64）

また、後藤によれば、ヒルズボロ・スタジアムは柱のないキャンティレバー式の屋根を有し、１９６６年のワールドカップや１９９６年のヨーロッパ選手権でも会場として使用されたイングランドでも有数のスタジアムであるが、過去に１９１４年には負傷者７５人、１９８１年にも負傷者３８人の事故を起こしている（65）。

たしかに、工事による大渋滞という予想外の出来事が事故を誘発した原因の一つであることは事実である。しかし、それ以上にスタジアムの環境不全や警備体制の不徹底といった、事故を引き起こす可能性を孕んだ必然的な要素にこそ、より多くの注意が払われるべきだろう。

「ヒルズボロの悲劇」の発生後、テイラー判事（Lord Justice Taylor）を団長とした事故調査団が結成され、１９８９年８月には中間報告書を、そして翌１９９０年１月にはテイラー・レポートと通称される最終報告書を政府に提出した。

テイラー・レポートは全１０９ページで構成されており、１）サッカーの現在と未来（FOOTBALL:PRESENT AND FUTURE）２）試合場の安全性（SAFETY AT SPORTS GROUNDS）３）ファンの管理とフーリガニズム（CROWD CONTROL AND

HOOLIGANISM) 4) サッカー観戦者法 (THE FOOTBALL SPECTATORS ACT 1989) 5) 最終勧告 (FINAL RECOMMENDATIONS) という5章立てとなっている。そして「最終勧告」の章では、1) 全席指定席 (All-Seated Accommodation) 2) カウンシルデザイン報告 (Advisory Design Council) 3) 国家視察と身体検査 (National Inspectorate and Review Body) 4) 観客席の上限 (Maximum Capacities for Terrace) 5) 食事とテラスの監視 (Filling and Monitoring Terrace) 6) 通路に関して (Gangway) 7) 金網と出入口 (Fence and Gates) 8) 柵の取り壊し (Crush Barriers) 9) 安全証明書 (Safety Certificates) 10) 各クラブの負債 (Duties of Each Football Club) 11) 警備計画に関して (Police Planning) 12) 情報に関して (Communications) 13) 緊急体制の再配置 (Co-ordination of Emergency Services) 14) 応急手当、メディカル施設と救急車に関して (First Aid, Medical Facilities and Ambulances) の計14項目に対して、特に提言が行なわれている(66)。

テイラー・リポートの内容について、吉田は「テイラー・リポートは、ヒルズボロ事件の直接原因を、警備側の群衆誘導・管理体制の手落ちと結論づけ、それまで支配的だった<テラスの客=フーリガン>イメージと今回の事故は無関係であることを示したが、それと同時に、安全な観戦環境をめぐって多岐にわたる提言をおこなった」(67)と概説している。

また、後藤は「このヒルズボロの悲劇をめぐり裁判を担当したテーラー判事は、警備ミスにとどまらず、スタジアムの構造、さらには、サッカー界の組織にまで検討を加えていった」(68)と述べている。

以上の二つの見解からは、イギリス政府によるイングランド・フットボールが抱える諸問題へのアプローチ方法の変化を窺い知ることができる。「フーリガニズムとの戦い」に特化していた従来の政策とは一転して、イングランド・フットボール界全体におけるあらゆる問題点を洗い流し、根本的な構造から改めていく姿勢を、彼らはこの報告書を受け入れることによって初めて示したのである。

ところで、『テイラー・リポート』は、(中略)とりわけスタジアム管理のあり方をめぐって、現状の観戦環境を前提にしたうえで観客のトラブルをいかに防ぐかという防衛的見地から、観戦環境の構造的改変にまで踏み込んでトラブルを未然に防ぐという予防的見地へと、そのトーンを変化させた。その端的な表現が、スタジアムの『全座席化 (All-seater policy)』であった」(69)という吉田の記述にもあるように、テイラー・リポートを特徴づける大きなポイントはスタジアムにおけるスタンドの改修案であり、その中でも最も大きなウエイトを占めるのが「全座席化」に関する記述である。その内容は、「各クラブは、全スタジアムを全席指定席化するよう改修工事が義務付けられ、その達成期限を当時の1部2部リーグについては1994年8月までに、同じく3部4部リーグについては5年後」(70)とするものである。

1960年代においてフリーガニズムが発生して以降、たしかにスタジアムのエンド＝テラスではいくつかの事件・事故が発生していた。そして、全席指定席化によって安全性が高まれば、スタジアム環境の改善効果が見込まれることは、ほぼ間違いのないことだった。しかし、それでも近代フットボールの形成以降約100年の長きにわたって多くの人々に愛されてきた伝統あるスタジアムの大胆な改修に伴うテラスの撤廃については、反対意見も多かった。イングランド・フットボールにおける伝統的なスタジアムやテラスの存在意義について、吉田は以下のように述べている。

スポーツを立てて観ること。おそらく多くの日本人には馴染みのないと思われる、このスポーツ観戦のスタイルは、イギリスの熱心なサッカーファンにとってはあたりまえの、伝統的なスタイルである。彼らはサッカー場へ、わざわざ立ち見をしに行く。ゴール裏に多くみられる、浅く段差のつけられたコンクリートの階段に、「クラッシュ・バー」と呼ばれる寄りかかるための手摺りがしつらえられただけの簡素な立ち見用スタンドは、「テラス (terrace)」と呼ばれる。このテラスは、彼らにとっては、世代にわたって応援してきたクラブの歴史そのものであり、アイデンティティの一部ですらある。そこは特別な場所であり、その思い入れを彼らはしばしば「雰囲気 (atmosphere)」と表現する。この言葉は、サッカー場で経験する、あらゆる自然で集合的な感情の発露を許容する場のあり方のことを示している。そのような「雰囲気」に満ちた場から、クラブの応援歌 (terrace songs) や独自の掛け声 (chant) が生まれ、サポーター集団を組織するリーダーが輩出されてきた。つまりテラスはそれ自体、イギリスのサッカーファンがはぐくみできたひとつの「集まりの文化」なのだ。(71)

また、飯田はフットボール・ファンにとってのテラスを「歴史や記憶の堆積された場所であり、かつ労働者階級の週末の安価な楽しみの場所」(72)と表現している。

テラスにはフリーガンだけでなく、フットボールとクラブチームを愛する労働者階級のフットボール・ファンたちが、安価な入場料を頼りに大勢詰めかけていたのである。彼らが醸し出す「雰囲気」から応援歌やチャントが生まれ、伝統は継承される。テラスは、イングランドのフットボール・ファンが長年文化を育んできた場だったのである。

結果的に、多くの反対意見や抗議運動にもかかわらずテラス撤廃の方針が見直されることはなかった。しかし、「こうしたスタジアムの徹底した全座席化は、イギリスのスポーツ・グラウンドのなかでもサッカー場だけに生じている事態である」(73)という吉田の記述を考えると、どの地域、競技も持ち得ていない伝統が息づいたフットボール文化の発信地を無くすことがはたして必要不可欠なことであったのかどうかについては、大いに疑問を感じるところである。



さて、様々な脅威による観客動員数の減少傾向とテイラー・リポートに基づいたスタジアムの改修工事は、ただでさえ延々と続く不景気の煽りで逼迫していた多くのクラブチームの経営にさらなる打撃を与えることとなった。

吉田の記述によると、戦後から1980年代半ばまで、イングランドにおけるフットボール人気は自国開催のワールドカップの影響などによる一時的な盛り返しはあったものの、ほぼ低迷の一途を辿っており、1948 - 49シーズン以降においてスタジアムへの観客動員数はコンスタントに減少している。1985 - 86シーズンにはピーク時の4130万人から1600万人にまで、およそ6割も落ち込んだ。とりわけ、1980年代初頭における観客数の落ち込みは急激であり、1980年には2500万人程度だったのが、およそ5年で約1000万人もの減少となっている(74)。

この数字からは、19世紀末期から20世紀初期において急速に普及したフットボールが、1980年代においては、戦後における娯楽の多様化や1960年代以降におけるフーリガニズムの脅威を主な原因とした段階的な人気の低下に歯止めをかけられずにいた様子が窺える。1966年に自国開催で初優勝を飾ったワールドカップではイングランド中がその躍進に熱狂したが、それでも劇的な観客動員数増加には結びつかなかったのである。当時のイングランド・フットボール界とイギリス社会が慢性的に抱えていた問題がいかに根深かったのかということを理解することができる。

また、この時期におけるクラブチームの経営状況の変化について、飯田は以下のように記述している。

スタジアムの改修工事費に加え、全席指定席になったためテラス時より総入場者数の減員から観客収入が減少し、各クラブは資金不足に陥ることとなる。ゆえにクラブは今まで以上に資金調達を積極的におこなう必要性がでてきた。今までのクラブ運営は、運営額規模が小さくビジネスの素人が井勘定でおこなわれていたり、地域の名誉職として行われているのが当たり前であった。しかし、今回の事件を契機としてイングランドは近代的なスタジアムへ変容しなければならなくなり、そのため各クラブは莫大な資金が必要になった。そこでスタジアムで如何に資金調達するかが大切な問題として浮上してきたのである。このような背景から、様々なクラブで経営を専門とするビジネスマンが登場してきた。そして余暇の楽しみとしてのフットボールから市場の資本が介入するビジネスへのフットボールへと大きく舵を切っていくこととなった。一部はFootball Trust が設立され、スタジアム改築などのために資金が貯蓄され各クラブに分配された。(75)

長年にわたって多くのクラブチームの会長が名誉職であったことは、地域の有力者が各地で行なわれていたそれぞれの民俗フットボールを庇護していた時代の名残であったと推測することができる。しかし、深刻な経済的打撃を受けることとなった多くのクラブチー

ムにおいて、そうした考え方はもはや通用しないものとなってしまったのである。

さらにスタジアムの改修および管理に関連するところでは、フットボール観客法（Football Spectators Act 1989）の第一部であるメンバーシップ制度（National Football Membership Scheme）が施行見送りとなったことも、各クラブチームによる自助努力がますます迫られる状況を作り出す要因となっている。フットボール観客法とメンバーシップ制度施行を見送った過程について、月嶋の記述を引用する。

1989年法の第一部は、「メンバーシップ制度」（National Football Membership Scheme）の導入を定めたものであり、1989年11月16日付をもって公布とされた。本制度は、イングランドとウェールズにおける「フーリガン」の発生を、未然に防ぐことを目的としていた。本制度の認可を受けた者が正式会員として登録され、フットボールの観戦が許可されることとされた。これにより、何らかの暴力行為に及ぶ疑いのある者は、スタジアム内への立ち入りを一切拒否されることとなった。よって、スタジアム内部における「フーリガン」の発生率を抑えることが可能となり、観客の統制管理が円滑に進むことが期待された。フットボール関連の犯罪によって有罪判決を受けた者は、禁固刑の場合は5年間、禁固刑以外の場合は2年間の会員資格の停止処分とされた。一方、会員は3つのクラブを観戦希望チームとして登録することができ、観戦時には会員証の携行を義務付けるものとされた。本制度は「フーリガン」による事件の抑制とともに、経常利益の上昇を意図していたと考えられる。

（中略）

「メンバーシップ制度」の導入については、控訴院裁判官テイラー卿（Lord Justice Taylor）による提案によって、施行の見送りが決定された。主な理由としては、F A（Football Association）に所属するクラブチームにとって、本制度の導入が大きな財政的負担となる可能性が挙げられた。さらに、スタジアムへの立ち入りを禁止された「フーリガン」が、その活動をスタジアムの外部へと移す可能性が危惧された。よって、今もなお、本制度の施行には至っていない。(76)

つまり、政府が先頭を切ってスタジアムにおけるサポーターの管理や警備を行うメンバーシップ制度の導入が見送られたことで、各クラブチームは独自の方法と財源によってスタジアム管理を行なわなければならなくなったのである。このことが、クラブチームに更なる資金調達必要性を生むこととなったのである。

こうして各クラブチームはイングランド・フットボール史上初めて本格的な営利企業化への動きを推進していくこととなった。この過程において見逃せないのが、F A規定第34条（FA Rule 34）の存在である。第34条は、イングランド・フットボールの過度な営利化を度々防いできた規定である。しかし当時の状況は、ついにこの規定を空文化させる

こととなったのである。

F A 規定第 3 4 条の概要と空文化された背景について、吉田の記述を引用する。

そもそもイギリスのサッカーは、たとえプロであってもアマチュア・スポーツ、コミュニティ・スポーツとしての理念を最優先し、利潤追求を主目的としないとする F A の理念に貫かれていた。こうした理念は、入場料収入の公平配分や選手の年俸上限などに関する、過当競争によるクラブ間格差の拡大防止を目的とした諸規定として制度化されていた。なかでも、F A 規定第 3 4 条 ( FA Rule 34 ) は、競争市場化への最大の防波堤となっていた。コン ( 筆者注：デヴィッド・コン ( David Conn )、スポーツライター ) のまとめによると、それは以下の 3 点からなる。

いかなる者も、サッカークラブの役員としての活動から報酬を受け取ってはならない。(ただしこの規定は 2 度にわたって修正されている。1981 年には、常勤役員のうち 1 名のみが報酬を得ることができるように、そして現在では、常勤であることを条件に役員数制限は撤廃された。)

いかなる者も、クラブ会社の株式配当を主たる収入源としてはならない。配当金は、額面価格の 5 % 以下とする。

クラブ会社は、資産剥奪から保護される。クラブ整理の際には、余剰資金は、スポーツ振興財団やその他の地元スポーツ団体へ寄付しなければならない。

プロのスポーツクラブである以上は、運営責任者のリスク分散のために有限会社化するのがつねであるが、この規定の目的は、そのことが利潤の最大化を主目的とする営利企業化へと直結することを防止し、それによって各クラブ間の競争バランスを保とうとする点にあった。いいかえれば、この規定によってイギリスのプロサッカー・リーグは、F A の監督下にその市場性を制限された一種のカルテルを形成していたのである。その背後には、効用最大化 ( utility maximization ) を目指す運営方針が、利潤最大化 ( profit maximization ) にも直結するという、素朴な経営哲学があったということができるだろう。

ところが、先に述べたスタジアム入場者数の減少は、1980 年代を迎えるまでに、大多数のクラブにとって、このような楽天主義が成立しないという現実がますます明らかになってきたことを示していた。(77)

この記述からは、F L が大規模なリーグ統括団体となりプロ選手の活躍が当たり前となっても、イングランド・フットボール界にはアマチュア的な考え方が依然として残っていたことを理解することができる。ピッチ内においてはプロ化が進んだものの、ピッチ外、

つまりフロントの運営体制においては旧来のアマチュアリズムが反映されたF Aの監督下における運営方針が展開されていたのである。しかし、財源の確保が従来になく重要視された当時の状況において、第34条の壁はついに破られることとなったのである。

各クラブチームによる営利企業化が進むと、マンチェスター・ユナイテッド、リバプール、トッテナム・ホットスパー、エヴァートン、アーセナルの通称「ビッグ5」をはじめとしたクラブチームは、さらなる利益拡大を求めた動きを展開するようになった。彼らが新たに主要な資金源候補として目を向けたのは、テレビ放映権料であった。

従来のF L所属クラブチームにおけるテレビ放映権料収入は、まずF Lが全額を一括して受け取り、規模や順位に関係なく全クラブチームに均等な額だけ再分配されるものであった。また、各スタジアムにおける入場料収入についても全額が主催クラブチームのものになるのではなく、幾らかは全クラブチームへの再分配用資金に回されることになっていた。こうした収入の再分配制度に対して、F Lの人気を支えていると自負するビッグクラブは、「F Lから独立した上での新たなリーグの設立」というカードを見せることで、異議を唱えたのである。そして、こうした動きの延長線上において、ついに新たなトップリーグであるP Lが誕生することとなったのである。

テレビ放映権料とビッグクラブによる新リーグ設立への動き、そしてP L設立への流れの概説を、吉田の記述から引用する。

現行のカルテル的縛りから自由になることでより利潤を見込めることのできた当時の人気強豪クラブ(いわゆる「ビッグ5」)は、独立リーグ設立をちらつかせることによってF Lに圧力をかけはじめ、その過程で、営利企業化への障害となっていた規定が次々と空文化されていくことになる。

まず、1983年に「ビッグ5」は、F Lに対して独立リーグの設立をもちかけたが、このときは、これを押しとどめようとした他のクラブとのあいだで、再分配用の入場料徴収割合を従来の5%から3%へと減額し、ホーム側クラブの入場料金はこれを免除するという、再分配制度の実質的廃止に近い妥協によっていったん立ち消えとなった。しかしこの独立リーグ問題は、そのすぐ後で再燃する。それには、衛星放送の実用化によって魅力的なコンテンツを探していたテレビ業界からの接近が大きな要因となっていた。1988年、「ビッグ5」は、独自にI T Vとのあいだで1992年までの放映契約を取り結ぶ。しかし、これにたいしてF Lは、当時の4ディヴィジョン全92クラブに放映権収益を分配する決定を下した。この時点で、新たな収益源として期待されたテレビ放映権の性格をめぐって、F Lと「ビッグ5」とのあいだの考え方の違いは鮮明化する。そしてそれは、プロサッカーの市場性をめぐる根本的な発想の違いであった。F Lは、再分配制度の温存によってプロリーグ全体のカルテル的収益体制の存続を目指したの

に対して、「ビッグ5」側は、個々のクラブの自由競争からなる競争市場化への転換を求めているのである。

こうして鮮明化されたプロサッカー・リーグをめぐる両者の考え方の違いは、1988年に結ばれたテレビ放映契約期間が切れる1992年を目前に控えて、決定的な局面を迎えることになる。1990年にF Lは、『ひとつのゲーム、ひとつのチーム、ひとつの声 (One Game, One Team, One Voice)』と題する報告書を発表する。ここで提案されたのは、F AとF Lからそれぞれ6名ずつ選出された12名からなる新たな委員会を立ち上げ、その傘下にアマチュアからプロまでのすべてのクラブからなる巨大なピラミッドを組み入れ、そして、テレビ放映権や広告による収入は、すべてこの統合リーグ全体のために、必要に応じて分配されるとする統合化案であった。

当然のことながら、このF Lによる統合リーグ構想は、「ビッグ5」にとっては、自らが独占的に享受できるはずのテレビ放映権料の再分配による減収がこれからも引き続くことを意味していた。そこで彼らは、F Lの報告書が発表されたわずか1カ月後に、L W T (当時のI T V ロンドン) と密かに接触し、独立リーグ設立と引き替えに独占放送契約を締結する約束を取り付ける。ただしその際に、彼らによる独立リーグ設立にはF Aの支援がぜひとも必要だった。

いっぽう、F Aにとって、F Lの提案は、1885年に世界に先駆けてサッカーのプロ化を許可して以来、先に紹介したように諸規定とそれにもとづく行政的管理をつうじて、アマ/プロ双方に対して行使してきた自らの行政権力に対する脅威として映った。ちょうどそこへもちかけられた独立リーグ設立への支援要請は、F Aにとっては、F Lへの反撃のチャンスだったのである。こうした思惑のもとにF Aは、1991年に『サッカーの未来への青写真 (The Blueprint for the Future of Football)』と題する報告書を発表し、そのなかで独立リーグ設立への支援を表明する。

こうした経緯を経て、1992年に、当時ディヴィジョン1に所属していた22クラブは、F Lに対して毎年約6億円の補償金を支払うことを条件として、プレミアシップ・リーグ (FA Carling Premiership League) として独立する。アマチュア・スポーツ、コミュニティ・スポーツとしてのサッカー理念を守り続け、プロサッカーをその理念の連続線上で監督することで、管理者として行政権を発動してきたF Aは、テレビ・マネーという新たな (そして巨大な) 収益源との結びつきを期待できた強豪クラブの営利企業化を、皮肉にも結果において後押しするかたちになったのである。じじつ、独立リーグ設立支援宣言書であった『青写真』報告では、今後のサッカー界に対して、より裕福な中流層をターゲットとするような上昇志向をもつべきだとの提言がなされているのである。それは、プロサッカー界のカルテル的収益体制から自由になって、弱小クラブに足を引っ張ら

れることなく、独自に営利追求をしたいし、またそうする条件に恵まれていた強豪クラブの経済的利害と、もともと行政監督下に位置づけられていたはずのＦＬの発案による統合リーグ構想が、自らの手中にあった行政権力の喪失につながることを恐れたＦＡの政治的利害とが、テレビ・マネーを媒介として結びついた奇妙な結果であった。(78)

この記述からは、クラブチームと統括団体の双方におけるマネジメント・マインドの変化を読み取ることができる。フリーガニズムとの戦いや、スタジアムの大規模な改修といった事柄に伴って増大した資金調達の重要性は、ＦＡの政治的意図とも相まって、約１００年間にわたってリーグ運営を統括し続けてきたＦＬという団体の存在さえも揺り動かす規模のムーブメントを呼ぶこととなったのである。

## ５．まとめ

本章では、中世以降のイングランド・フットボールを、その担い手の変遷史に重点を置いて概観した。

中世における民俗フットボールのプレイヤーは一般大衆であり、彼らのプレーを各地域の支配者層が庇護する形態でフットボールが行なわれていた。その後、産業革命などによる社会システムの変化とともに民俗フットボールは衰退し、パブリック・スクール内において教育的側面から上流階級出身の生徒たちによってフットボールがプレーされるようになり、その卒業生たちが主に大学においてアソシエーション・フットボールの礎を築いた。交通機関の発達とともにフットボールを愛好する者たちはイングランド全域に広がり、再び庶民がフットボールの主たるプレイヤーとなった。１９世紀末期において、ついには労働者階級の中からフットボールを生業とするプロ選手が登場するに至ったが、統括団体であるＦＡやクラブチームの理事会には依然として上流階級出身者が名を連ねていた。以降、２０世紀前期にはフットボールは国民的スポーツとしての地位を築いていたが、戦後には人気が徐々に低下し、１９６０年代以降はフリーガニズムが台頭したことでフットボールへの政治介入の事例が散見されるようになった。１９８０年代において、的を射ないフリーガニズム対策と警備体制の不備、スタジアムの老朽化などの要素が重なって大規模な事件・事故が発生し、１９９０年代を迎える頃には約１００年続いたＦＬというシステムを脱して、ＦＡの主導によって新たにＰＬの設立がなされるという、イングランド・フットボール史における新たな局面を迎えることとなったのである。

ＦＡの設立、統一ルールの制定によってプレー環境が整備された１９世紀後期以降、フットボールはイングランドにおいて広く庶民に愛されるスポーツとなった。中世以来、再びフットボールの担い手となった庶民の間においてプレイヤーの数が増加したことは言う

までもないが、さらに注目すべきことは民俗フットボールにおいてはその存在が曖昧であった「観客側」におけるフットボール文化が生まれたことである。たしかに、1960年代以降のイングランド・フットボールにはフリーガニズムの脅威が付きまとうこととなる。しかし同時に、その舞台となったテラスにおいて、フリーガンより多くの人々によって吉田の記述中にあるところの「雰囲気」が醸成されていたこと、そしてさらに多くの人々がテレビなどのメディアを通じてフットボールを観戦していたこともまた、紛れもない事実なのである。

そうした一般大衆におけるフットボール観戦文化を根本から覆す可能性を持つ出来事が、P Lの設立であった。富裕層を新たなターゲットに据えたP Lの観戦チケットは以前に比べて高価格となり、またP Lの放映権独占契約相手が衛星放送会社であるBスカイBに取って代わられたことで、テレビでのフットボール観戦も有料となったのである。

100年以上に亘ってフットボール人気を支えてきた庶民にとって、この観戦環境の変化は逆風以外の何物でもなかったと言えるだろう。

## 第二章

### 1991年7月裁判と関連する諸議論の考察



## 1. 裁判の概要

第一章において概観してきたように、創設以来一貫してアマチュアリズムを掲げてきた F A が一転して商業主義的な選択へと傾いた点のみを見ても、P L の設立という出来事はイングランド・フットボールの歴史において非常に大きな転換点であった。そして、その過程においても特にイングランド・フットボール界における様々な立場からの多様な考え方を垣間見ることができる重要な局面が、本章で扱う裁判 R v Football Association Ltd, ex parte Football League Ltd; Football League Ltd v Football Association Ltd である。F L が F A を相手取って争われたこの裁判は、1991年7月に開かれた。

裁判の概要については、裁判記録における HEADNOTE( 頭書 )、COUNSEL( 弁護人 )、JUDGMENT-READ ( 判決 )、PANEL ( 審査員 )、DISPOSITION ( 措置 ) の各項を参照する。

頭書：

イングランドにおけるアソシエーション・フットボールのルールを作成する権威であり統括団体でもある F A は、もっとも重要な大会で四つのディヴィジョンによって構成されている F L など、いくつかのリーグや大会を認可していた。F A の認可の下にある F L でのプレーを希望するすべてのフットボール・クラブチームは、F A に承認されることで F A の会員になるか、F A 付属の協会の一員にならなければならなかった。F L からの離脱を意図するクラブチームは、その時点におけるシーズンの終了までに離脱意図の通知をするという F A の規定を要求されていた。F L には、F A の株主でもある F L 経営委員会の 9 名の会員を指名する資格が与えられていたが、F L 自身は F A の株主ではなかった。しかし、F L を構成する四つのディヴィジョンを運営するための F A による許可を毎年適用している F A 規約との一致という事実を理由として、F L は F A と契約で保証された関係を結んでいた。F L は 1988 年に、F L のメンバーであるクラブチームが F L の会員権を終える、もしくは、会員権を早めに終えて F L に対して補償を行なう意図を、実行する 3 シーズン前から通知を与えることを要求する規定を採用した。F A は、この規定に対して警告を行なった。F A は 1991 年に、F L ではなく F A によって運営され、ディヴィジョン 1 に所属するトップクラスのクラブチームから成る P L を形成することを決定した。F A はクラブチームの F L からの離脱を促進するためにいくつかの規約を与えることで、F A の規定によって要求されているよりも長い F L 会員権終了の通知を与えることをクラブチームに要求するという F L が表明した条項が無効となるように、自らの認可規定を修正した。F L は、( 1 ) F A はアソシエーション・フットボールがプレーされる上において独占的な支配力を持っている。( 2 ) F L と契約で保証されていたにもかかわらず、実際には F A の規約がフットボールにおける立法上の規約であった。

( 3 ) F A は、F A がもし国民の生活における重要な側面を規定していなければ、国家は F A が持つ機能を果たすような公共団体を設立しなけりばならなかつたであろう境遇の中において役割をこなしていた。...という三つの理由から、F A が裁判による再審理に従う義務があるとして、とりわけ P L を設立する、もしくは自身の規定に対して必然的な修正を施すという F A の決定に対する、裁判による再審理に向けた訴訟手続を進めた。

判決 F A は一般に、もしくは、特に F A と契約で保証された F L の扇動の下において、裁判による再審理に影響を受け得る団体ではない。F A は、その実質上独占的な権力やフットボール界における多くの人々に対する決定の重要性を持つにもかかわらず、私法の下においてのみその権力が生じ、また義務が存在する、国内の団体である。もし F A が存在していなくても、国はその機能を果たす公共団体を設立していたであろうということについては、国の組織や機関、そして潜在的な政府の関心によって、直接的にせよ間接的にせよ証拠がなかったために実証されなかった。F A が公の団体であり、また法則が政府による権力乱用の監督のために設計されているということに基づくと、フットボールの統括団体に適用することは不適當だろう。したがって、裁判による再審理の申請は退けられる。

弁護人：

上告側；デヴィッド・オリヴァー勅選弁護士、デヴィッド・パンニック、ジョン・ニコルス。被告側；ジョン・ダイソン勅選弁護士、ナイジェル・プレミング、ロバート・H T・ヒルドヤード。

判決：

弁護人による提案の後の考慮期間を経て、1991年7月31日に判決が述べられた。

審査員：

ローズ判事。

措置：

裁判による再審理の申請は退けられた。(1)

頭書には、F L と F A のそれぞれの立場、F L による訴状、判決の理由などが記載されている。訴状にある三つの項目のうち、( 1 ) と ( 2 ) は F A が P L のメンバーとして F L ディヴィジョン 1 所属のクラブチームを引き入れるために自らの規定を改定し、それを適用させていたことに関連するものである。独占的な支配力によって有利な状況を作り上げ

たF Aの手法に、F Lは違法性を見出していたのである。しかし、この裁判の審査員である判事のローズ（Mr. Justice Rose）は、F Aを再審理の対象外としてF Lの訴えを退けたのである。

さて、公聴期間（1991年7月22日～25日）および判決日（1991年7月31日）における法廷の状況と関係者による発言については、当時の新聞記事を参照する。

7月23日付のタイムズとガーディアンは、公聴期間初日となった7月22日における法廷の様子、裁判の注目点などを報道している。

タイムズに掲載された記事を、以下に引用する。

「法廷にて闘争開始の銃声が響き渡る」

F LとF Aとの間における紛争は昨日、法廷に持ち込まれたことで不可避な段階へと突入した。P Lを設立するというF Aの決定の裁判による再審理を求めたF Lの上訴が、フットボールのために重苦しい地下室と化した最高法院王座部第20法廷にて始まった。

（中略）

法廷は、F Aによる三つの決定（P Lを設立すること、クラブチームがF Lから離脱する場合は最短3年前に離脱をF Lに通知することをクラブチームに要求するF L規定第10条を却下すること、P Lの創設を促進するようにF Aの規定を改正する決定）に対して異議を唱えるF Lの訴訟に耳を傾けた。(2)

また、ガーディアンは以下の記事を掲載した。

「法廷でのプレミア・フットボール」

さて、8日間にわたってローズ判事は、F Aが自身によってP Lを設立する（F Lは、F Aにその権利が無いことを主張している）権利を持っているかどうかを判断する。彼はまた、F AがF Lディヴィジョン1に所属するクラブチームに対して、P Lに参加するよう要請して彼らとF Lとの契約を壊すことによって、彼らを誘ったのかどうかについても判断する。

何が起こったとしても、裁判の敗者のための「延長戦」はすぐさま起こるだろう。すなわち、敗者が上訴することはほぼ間違いない。そして、それはまったく無意味になりうるだろう。たしかにP Lを設立すると言い続けてきたF Lディヴィジョン1所属のクラブチームにとって、上訴とはつまり、1シーズン中にクライヴ・アレン（筆者注：Clive Allen、プロ・フットボール選手）が遠征する回数以上の法廷への「旅」を意味するのである。

しかし、これら全ての決定はイギリスの法廷では手に負えなくなる可能性がある。少なくとも、あるトップクラブの取締役の一人は、P Lがテレビ資本の精鋭によるヨーロッパ・リーグへの足掛かりであることを、非公式に認めた。そのときは、この決定に関する議論はブリュッセルに持ち越されるだろう。(3)

タイムズが本裁判の導入情報として三つの争点を簡潔に報道している一方で、ガーディアンは、早くも展望記事として裁判の敗者による上訴が早急に行なわれる見通しを報じている。さらに、その上訴も棄却されるであろうこと、P Lがヨーロッパ全土のエリート・クラブチームによる新リーグ「ヨーロッパ・リーグ」への足掛かりになるだろうことを記事としている。つまり、ガーディアンはすでにF Lによる訴えが退けられる見通しを踏まえた上で、この裁判を報道していると見るができるだろう。

また、同日付のデイリー・ミラーには裁判の内容に関する記事こそ掲載されていないものの、F Aの手法に異議を唱えるプロ・フットボール選手協会 (Professional Footballer's Association、以下、引用部を除いてP F Aと表記する) のストライキに向けた動きについて、センセーショナルな見出しとともに伝えている。

「ストライキ！」

～スター選手が戦いを仕掛ける～

～選手全員がF Aを離脱するとP F Aが語る～

F Lの2500人の選手たちは、フットボール史上初となるセンセーショナルな選手全員によるストライキを企てると脅している。

彼らはF Aによる議論の余地あるスーパー・リーグ設立プランを阻止しようと、プレーを止める準備をしている。

新シーズン開幕のたった25日前、多くの選手たちはフットボールが彼らのコントロールの下からひたたくられることについて怒っている。

選手の連盟であるP F Aの会長であるゴードン・テイラーは、P F Aのメンバーたちが団結しており、イングランドのフットボール全体を変えてしまうようなF Aの遠大なプランに怒っていると主張している。

P F Aの8名による委員会での会議後、テイラーは独立したスーパー・リーグに立ち向かうための戦略を練った。

(中略)

あるP F Aのメンバーは昨夜、「我々は全員、スーパー・リーグ設立へのあらゆるプランに対して精力的に反対することに同意している」と、列を乱して認めた。

「F Aには我々の未来を決定する権利がないという点について、我々が2500人の選手たちと賛同していることを私は知っているし、我々P F Aはそう感じている。」

「ストライキ？我々は望んではない。我々は遠い将来における何かを望んでいるのだ。しかし、我々はそれを除外したりはしない。」(4)

法廷での出来事を伝える一般紙とは異なり、デイリー・ミラーはPFAと選手たちによるストライキの可能性という言わば「場外戦」を大々的に扱っている。この法廷闘争初日の報道姿勢において、タブロイド紙の特徴を垣間見ることができるだろう。すなわち、キャッチーさが最大の売りであるタブロイド紙の記事対象が、フットボールにおいてもっとも大衆の注目を引きつける存在である選手であることが多いという特徴である。

7月24日のタイムズは、公聴期間2日目(7月23日)の法廷の様子を、FLとFAの双方の弁護人のコメントと合わせて報じている。

記事によると、FLの弁護士であるオリヴァー(David Oliver)は「もし『超人的な』努力によってFAがその不偏性を何とか維持できても、そのことでまたFAは組織を統制するための周囲からの敬意を失うことになるだろう」と語り、またFAに対して「審判は選手になるべきではない」と忠告した。しかしその一方で、FA側の弁護士であるダイソン(John Dyson)は「FAがしたいと思っている行動を妨げるものは、間違いなく何もない」と語り、FL側の主張に反論した(5)。

オリヴァーがFAへの忠告を込めて発したと思われる「審判は選手になるべきではない(原文では”No referee should become a player”)」というフレーズは、本来は統括団体として一步引いた立場にあるはずのFAによるPLの設立および運営への直接的な関与を、ピッチ上において審判が選手のようにフットボールをプレーすることに見立てた上で、PLが設立された場合におけるFAの不偏性維持能力に対するFL側の疑問を簡潔に表している。

また、オリヴァーの発言における「超人的な(原文では”a ‘superhuman effort’”)」という強い語気からは、ビッグクラブと結託してPLの設立を計画したFAが、ビッグクラブではない他の多くのクラブチームに対して公平なリーグの運営を行なうことは不可能に近いであろうというオリヴァーとFLによる断定的な見解を見て取ることができる。

7月25日のタイムズには、公聴期間3日目(7月24日)の法廷におけるFAの主張を中心として、裁判についての記事が掲載されている。

「FAが新リーグに向けた実例を示す」というサブタイトルが付いたこの記事は、24日の公聴会において、FAがPLの設立はイングランド・フットボールにとって良いことであり、さらにPLが深刻な経営上の問題はなんら起こすことがないだろうという楽観的な予測を述べたと報じている。また、法廷でダイソンによって読み上げられた声明の中で、FAの会長であるミリチップは、ドイツにおいて一つの統括団体が国際試合を監督すると同時にブンデス・リーガを運営している事例を挙げた上で、FAが国際試合とPLを運営

するべきではないという理由はどこにも無いと述べたとしている。さらに記事では、こうした発言によってミリチップは、23日の公聴会においてF L側から発せられた「審判は選手になるべきではない」という忠告を却下したとも記されている(6)。

7月26日のガーディアンは、公聴期間最終日である7月25日における法廷の様子について報じている。

記事は、ローズが判決を持ち越し、7月31日に最終判決を下すことになった旨を報道している。また、F LがF Aの案を非合法であるとする判決を待ちわびている一方で、F Aは当時のF Lディヴィジョン1に所属するクラブチームを主な顔ぶれとしたP Lを運営するという内容の宣言を行なおうとしていることも、合わせて報道している(7)。

8月1日、タイムズとガーディアンの両紙は7月31日に下された判決と、判決に対するF L、F A、P F Aそれぞれの反応を報じた。

タイムズに掲載された記事の内容は以下の通りである。

「判決がP Lへの道を明らかにする」

昨日、F Aは法廷にて重要な勝利を挙げ、1992 - 93シーズンのP L開幕への道を明らかなものとした。しかし、ほぼ必然的に、ローズ判事がF Aの支持を表明した後、F Lによる上訴があるだろう。

予想されていたことだが、F AとF Aの支持者たちはローズ判事がF Lによる三つ全ての訴因を退けたことで勝利した。アーセナルの副会長であるデヴィッド・デインと最高取締役であるケン・フライアーにそれぞれ見守られて、判事はF Aが裁判による再審理の対象であるという主張を却下し、F AがP Lを運営する権利を有することに同意し、ゆゆしくも、F A規定が優先事項であるとして、クラブチームがF Lから離脱する場合は最短3年前に離脱をF Lに通知することをクラブチームに要求するルールから解放した。

(中略)

P Lの主要な扇動者と広く見られてきたデインも、同様に勝利した。「フットボールにとって歴史的な瞬間だ」と、アーセナルの副会長は語る。「私は9年間、P Lに向けてドラムを叩いてきた、私はどんな時でもF Aの保護下におけるP Lがフットボールの未来のための正しい動きであると信じてきた。」

「私は下位ディヴィジョンも含めてフットボールにおける全ての局面において、新たなシステムの下でより健全になり、より裕福になると固く信じている。」

予想されていたことだが、F Lは勇敢な顔を装おうと試みているように、F A側の見立てとは違う見方をしている。F Lの最高責任者であるアーサー・サンドフォードは、(中略)「我々は、まだハーフタイムにいるだけだ」と語った。「もし

ひとつの同意が全ての当事者における満足な状態に到達できるなら、そこに上訴の必要性は無いのかもしれないがね」と、彼は語った。

(中略)

昨日、PFAの会長であるゴードン・テイラーは、FAは勝者の態度で会議に臨むべきではないという警告を繰り返した。

「今すぐ、FAは統括団体として行動することができるが、それは融和的にされるべきだ」と、テイラーは語った。「しかし、もし彼らがルイ16世のような態度を取れば、神権説と横柄な尊大さへの反抗によって、彼らは彼らの先にある革命を目にすることになるかもしれない、ルイ16世がそうだったようにね。」(8)

この記事からは、1日付のタイムズが判決の概要のほかにも勝利を収めたFA側、上訴が棄却されたFL側、そしてFAへの反対姿勢を崩さないPFAという三者の様子をそれぞれ報じていることが分かる。中でも、三つの訴状すべてにおいて敗北を喫したFL側の描写は注視すべき内容である。FLの状況を表した「勇敢な顔を装おうと試みている(原文では"it attempted to put on brave face")」という表現からは、PL設立論争においてFLがついに覆し難い劣勢に追い込まれた様子を見て取ることができる。

また、ガーディアンには以下のような記事が掲載された。

「選手の力のみが、新たなエリートの前に立ちはだかる」

昨日、最高法院にてFLが敗北に見舞われたあと、選手連盟が独立したエリート・リーグへの最後の障害となるようだ。

FAの前に広がるPL設立の道は前途洋々となったものの、ひょっとしたらFLディヴィジョン1所属クラブチーム自身によってほぼ全体が運営されるかもしれない。

FLはPL設立案を打破する最大のチャンスは上訴にあると常に感じてきた。しかし昨夜、それは疑わしくなった。

(中略)

自らが統制する新たなディヴィジョン1について、全ての団体から承諾があるのかどうかを尋ねられた時、アーサー・サンドフォードはただ「確かなことは、FLディヴィジョン1所属クラブチームが、従来よりも財務上・商業上における多くの自治権を持つことを強く求めていることだ」と語っている。(9)

この記事において注目すべきことは、FL側に立った記事が目立つ点である。PLがFAによってではなく所属するクラブチーム自身によって運営されることになる可能性を伝える内容は、同日付のタイムズには存在しない記事である。

タイムズがF Aの揺るぎない優勢を伝えている一方で、北部の工業都市であるマンチェスターを本拠地とするガーディアンはF L側に未だ残る一縷の望みについて報じている。両者における判決日の報道内容からは、それぞれの立場を理解することができる。

## 2. 関連する諸議論の考察

さて、本研究で対象としている各紙の紙面上では、判決後から数週間にわたってプロ・フットボールの関係者や記者、ファンといったフットボールに関係する多くの人々によって、それぞれの立場から意見や提言などがなされている。その内容は、判決に対する感想から、未来のイングランド・フットボールへの展望など、様々である。

判決そのものの批評記事としては、8月22日付のタイムズにおける裁判結果をダイジェストで報道するコーナー「Law Reports」の記事がある。

「F Aは裁判による再審理の対象ではない」

F Aは、一般においても、またF Lが実質的に契約の上でF Aに縛られている状態におけるF Lの扇動においても、裁判による再審理の対象となる団体ではなかった。

7月31日、王座部にて、ローズ判事はF LによるフットボールのP Lを設立するというF Aの決定についての裁判による再審理の申請を拒絶した。

ローズ判事はF Aが自国国内の団体であり、F Aの権力は私法においてのみ生ずるものであり、また存在するものであると語った。

(中略)

F Aが裁判による再審理の対象ではないという判決の結論は、歓迎されるものではなかった。多くの人々がフットボールをプレーし、さらに多くの人々が試合を観戦し、何百万ポンドもお金がフットボールに関係している。こうしたことと同様のことが、しばしば他のスポーツでも言うことができる。要するに、こうしたことすべてが、人気娯楽の姿なのだ。(16)

「多くの人々がフットボールをプレーし、さらに多くの人々が試合を観戦し、何百万ポンドもお金がフットボールに関係している」という表現は、フットボールのトップカテゴリーにいる者はごくわずかであり、ピラミッドの大部分は一般庶民であることを強く思い出させられるものである。

また、本記事の最終段落において、判決は好ましいものではなかったというタイムズの見解が述べられている。この見解は、フットボールの未来についての審判が「F Aが裁判



による再審理の対象ではない」という、競技そのものとは関係のない次元において結論を見ることになってしまった状況についての苦言であると考えることができる。この苦言は、フットボールが多くのイングランド人が何らかの形で関わっている国民的なスポーツであることの裏返しであると言えるだろう。

ＰＬの設立を強く推進していた「ビッグ５」の関係者のうち、当時アーセナルの監督であったジョージ・グレアム（George Graham）は、８月９日付のガーディアンの記事上において、イングランド・フットボールの将来に対する展望を、ＰＬとテレビ資本によるフットボール運営の将来的成功に対する期待とともに述べている。以下に、記事を引用する。

「グレアムのリッチへのパスポート」

～デヴィッド・レイシーが、アーセナル監督のヨーロッパ、テレビ、ＰＬに関する見解を聞く～

ジョージ・グレアムは、ＰＬ設立の熱狂的なサポーターであるアーセナルが、予見できる未来においてテレビ志向のヨーロッパ・リーグでプレーしているだろうと信じている。そして一方で、彼はトップ・ディヴィジョンの所属クラブチーム数が１８か１６にまで減少すると見ているようだ。

昨日、ロンドンにて、アーセナルの監督はスポーツライターに対して「来シーズンにはＰＬが誕生している」と語った。「しかし、それはスーパー・リーグにはならない。外国のコーチ達はとても多くの試合数をこなす我々を気が狂っていると考えている。」

（中略）

「進化は起こる」と、彼は昨日語った。「私にはヨーロッパ・リーグでプレーしているビッグクラブと、アウェイゲームをテレビで生観戦するサポーターたちの姿が見える。しかし、私はこうした状況が小規模なクラブチームにとって有害になるとは考えていない。才能ある者は常に成功するだろう。」(10)

グレアムは記事の中で、ＰＬを足掛かりとしてヨーロッパを舞台としたエリート・クラブチームが覇を競うテレビ資本のリーグが近い将来に設立されることを予想している。そして同時に、そうした状況が小規模なクラブチームにとって必ずしも悪いことにはならないだろうという意見を述べている。

ＰＬや「ヨーロッパ・リーグ」といった対象についての楽観的なコメントがＰＬ設立に否定的なガーディアンの紙面において展開されたことは、非常に興味深いことである。この記事のタイトルとなっている「グレアムのリッチへのパスポート（原文では"Graham's passport to riches"）」という表現には、ある種の皮肉が込められていると見ることもできるだろう。

諸手を挙げて P L の設立に賛同するビッグクラブ関係者に比べてやや控え目に賛成する立場をとる者もいる。8 月 2 日付のタイムズにおいて、当時クリスタル・パレスの会長であったロン・ノエイズ ( Ron Noades ) は、P L の設立に条件付きながら賛成であるという立場を明らかにしている。以下に、記事を引用する。

クリスタル・パレスの会長であるロン・ノエイズは P L を歓迎しているが、それはディヴィジョン 1 所属クラブチームによって P L を形成するか、F A が F L のもとで形成されるかという決断によるという。

ノエイズは F A による「青写真」が見当違いであったと語った。彼は「私は『青写真』が慎重に検討されたものであるとは全く思っていない。私はイングランド代表監督であるグレアム・テイラーと同様の態度をとる。強いナショナルチームを作るには、強いディヴィジョン 1 が必要だ。」(11)

この記事からは、従来よりも大きな収入が見込める P L の設立自体には賛成だが、その分け前を所属するクラブチーム自身がコントロールできるかどうかを見図っているノエイズの様子を窺い知ることができる。この記事において明らかにされているノエイズの態度は、ビッグクラブ以外の多くのクラブチームにおける会長の胸中を的確に代弁したものであると言えるだろう。

ノエイズが会長を務めるクリスタル・パレスにあっても、当時監督であったスティーヴ・コッペル ( Steve Coppell ) が持っていた意見は P L の設立に対して真っ向から反対するものであった。同じく 8 月 2 日のタイムズには、コッペルによるコメントも掲載されている。以下に、記事を引用する。

「F A の P L 設立プランへの警告」

～コッペルが「ビッグ 5」の強迫的な戦略を非難～

昨シーズンの F L をアーセナル、リバプールに次ぐ第 3 位で終えたクリスタル・パレスの監督：スティーヴ・コッペルが、来年開幕する P L に向けた F A の案に対して、断固として反対の立場であることを明らかにした。

「長年におけるフットボールで最も悪しきことが起こってしまった」と、コッペルは語った。「ビッグクラブにとって、P L 設立は重要なことなのかもしれないが、我々のような他のクラブチームにとっては良いことではない。P L 設立案は、フットボールの未来に大きなクエスチョン・マークを付けることになった。もし、ビッグ 3 が毎年タイトルを取るようなシステムを望むのなら、この方法でやれば良い。しかし、もしフットボールのグラスルーツを破壊してしまえば、何も得ら

れることはない。」

(中略)

コッペルはP Lのコンセプトを「総じて退屈」と表現した。彼は「ビッグ5はすべてのクラブチームの頭に銃口を突き付けた。P L設立のプランに加わるか、そうでない場合の恐怖にさらされるか。他のクラブチームは怖くて立ち上がることができず、P Lに加わるクラブチームとしてカウントされ、ビッグクラブとともに歩んで行く。この内部抗争は見ていて衰れた」と述べることで、アーセナル、トッテナム・ホットスパー、リバプール、エヴァートン、マンチェスター・ユナイテッドを攻撃した。(12)

コッペルが率いた1990 - 91シーズンのクリスタル・パレスは、F Lディヴィジョン1にあって小規模なクラブチームでありながら3位という好成績を収めていた。ビッグクラブではないクラブチームにおける戦い方の成功例を示したとも言えるシーズンを送った直後のコッペルは、ビッグクラブとF Aの主導によって設立されようとしていたP Lにおいて予見できる力関係の不均衡に対する危惧を、本記事においてコメントしている。

また、コッペルは下された判決について、イングランド・フットボール界全体において「最も悪しきことが起こってしまった」とし、P Lの設立が「フットボールの未来に大きなクエスチョン・マークを付けることになった」としている。さらに、「もしフットボールのグラスルーツを破壊してしまえば、何も得られることはない」という発言も見られる。

以上からコッペルは、判決がクラブチーム間における実力格差の拡大とそれに伴うリーグの停滞をもたらすというトップレベルのクラブシーンにおける見解とともに、イングランド・フットボール界におけるピラミッドの底辺にまで悪影響が至る可能性についても立場を明確にしていることが分かる。

8月7日のタイムズには、同じくF Aの動きに対して反対の姿勢をとり続けるP F Aの会長であるゴードン・テイラー (Gordon Taylor) のコメントが掲載されている。

記事の中でテイラーは、ディヴィジョン2所属のクラブチームの間においてリーグの分離は不可避なものであるという空気が強く流れていることをしばしば認めながらも「白旗は上がっていない」として、さらに「私はディヴィジョン1が本当に全体的に一緒になって行動をするのかという点で納得していない。選手たちは以前においても重要な役割を担ってきたし、彼らが再びそうした行動ができるということに何の疑いもない」と語っている(13)。

テイラーは、公聴期間の初日や判決日など、裁判の一連の流れにおける節目においてF Aへの強硬な姿勢を打ち出してきた。そしてこの記事からは、判決から1週間が経過し、下位クラブチームの間でP Lの設立の流れを止めることに対する諦めの空気が漂う中にあるにもなお、テイラーとP F Aは頑なにF Aに対する対決姿勢を見せていたことを窺うこ

とができる。

さて、ここまで挙げたコメントや提言の数々は、プロ・フットボールの関係者によるものであった。しかし、8月8日付のタイムズにおける投書欄に掲載されたPLの設立に対して否定的な見解が示された投稿は、フットボール・ファンであるスティーヴ・コルベット(Steve Corbett)によるものである。以下に、その投稿を引用する。

「エリート主義は衰退へと導く」

拝啓。

プロ・フットボールの統制役として信頼すべきなのはFAとFLのどちらの団体なのかということについての討論、論争、反訴がないまま一日が過ぎることはめったにない。そして私は、完全に、強固に、どのような形態になろうとスーパー・リーグは長い目で見ると我々の国民的スポーツにとって損失であり、エリート主義が必然的にフットボールの崩壊へと導くであろうと信じる人々の側につく。

我々に良き供給をしてきた4ディヴィジョンから成るリーグ構成は、良きフットボールのために維持すべきであり、この4ディヴィジョン制はクラブチームと選手の双方に彼らが持つ才能や野心に見合った適切なレベルを探る機会を与えてくれる。(中略)

もっとも高いレベルにある人たちの誰も、スーパー・リーグ設立というアイデアに対して反対している私や他の多くの人々のことを気にしていないように見える。(中略)

しかし、私にとって最も重要なコメントが入ってきたのは、8月2日のタイムズ紙においてクリスタル・パレスの監督スティーヴ・コッペルが、私が察するにこの国のフットボール・ファンの大多数も持っているであろう意見を発したときのことだ。

(中略)

コッペルは正確に要点を突いている。つまり、フットボールに関わるすべての人々が立ち上がる時であり、考慮されるときであり、短期間における経済的な見返りではなく長い目を見たときのフットボールにとって良いことについて考えるときなのである。

スティーヴ・コルベット(14)

コルベットは先述したコッペルによる意見に賛同するとともに、「4ディヴィジョン制はクラブと先週の双方に彼らが持つ才能や野心に見合った適切なレベルを探る機会を与えてくれる」という指摘を行なっている。この指摘は、エリートではない多くのフットボール

選手たちや小規模なクラブチーム、そして彼らを応援するファンこそが、イングランド・フットボール界を支えているということを端的に表していると言えるだろう。

また、「もっとも高いレベルにある人たちの誰も、スーパー・リーグ設立というアイデアに対して反対している私や他の多くの人々のことを気にしていないように見える」というコメントからも、P Lの設立に対して反対する声が少数ではないことを推測することができる。

8月13日付のガーディアンには、同紙の記者であるデヴィッド・レイシー (David Lacey) による長文コラムが掲載されている。以下に、そのコラムを引用する。

「商業的好機への期待はほとんどない」

多くのシーズンが上昇する楽天主義とともに始まるが、1991 - 92シーズンも例外ではない。依然として、イングランドのスポーツたるフットボールの中にある何か大切なものが、ごく少数のクラブチームを豊かにするものの全体的に見ればフットボールの見通しを貧弱にする商業的な波にさらわれようとしているという感情を取り除くことは難しい。ビデオはラジオスターを殺し、そしてテレビ契約はF Lにもたらされないのである。

(中略)

この2シーズンで、F Lの年間観客数は1900万人のプラスとなっている。1990年イタリアワールドカップにおけるイングランド代表の成功や、それ以上に、フットボールという競技自体の活気が復活した感覚から、2年前の「ヒルズボロの悲劇」から付いて回っていた暗い絶望的な雰囲気は注目に値する速さで一掃されてきている。

(中略)

今のところ、今シーズンが103年目のF Lにとって単一の存在としての最後のシーズンとなりそうだ。これまで、入場料収入全額を自身で保有することに賛成票を投じた1983年以来のクラブチームからの圧力はF Lをバラバラにする脅迫してきたが、まさに彼らの思い通りになろうとしている。

3チームの昇格・降格方式を維持した上で22のクラブチームから成るP Lは、従来のように下部ディヴィジョンに対してビジネス上の影響を与えるだろう。しかし、1986年、1988年、そして今、F Aの命令のもとに達成されようとしているビッグクラブによるリーグ分離の脅迫は、フットボールにおける経済面のみならずフットボールの雰囲気や内容について決定的な影響を持つことになるだろう。今シーズン終了後も、クラブチームは似たような体系の上に区分けされ続けるかもしれない。しかし、テレビ放映権やスポンサーシップの契約による経済的なケーキのシェアについては、「ビッグ5」と他の協力者によって設立された

パワーベースの新たな幅を反映することになるだろう。

ディヴィジョン 1 にとって、グラウンドを近代化するための財源を集めて発達させることや、イングランド内にいる国外に移籍しようとしている幾らかの選手を引き留めることの必要性は、明白だ。しかし、トップクラスのクラブチームとそれ以外のクラブチームとの間における大きすぎる経済的な格差は、フットボール界全体の健全性にとって良いことにはなり得ない。

( 中略 )

ガッツァ ( 筆者注 : Gazza、ポール・ガスコイン ( Paul Gascoigne ) の愛称、ガスコインはプロ・フットボール選手 ) のラツィオ移籍、スパーズ ( 筆者注 : Spurs、トッテナム・ホットスパーの愛称 ) の会社乗っ取り、プロフェッショナル・ファウルをめぐる議論、オールド・トラッフォードでの騒々しい喧嘩、ケニー・ダルグリッシュ ( 筆者注 : Kenny Dalglish、このシーズンにおいてリバプールの監督を辞任していた ) の辞任などがあった昨シーズンは、見出しの書き手にとってまさに天国だった。しかし一方で、アーセナルが見せた一貫性やマンチェスター・ユナイテッドのヨーロッパにおける異端的な成功、鋼鉄のようなスパーズによる F A カップ制覇などは取り払われてしまい、全ての思い出は灰色に色あせてしまった。

二つの最も素晴らしい業績 ( シェフィールド・ユナイテッドがディヴィジョン 1 に残留したことと、さらに注目すべきことである、ハートルプールがディヴィジョン 4 からの昇格を勝ち取ったこと ) は、失われた理想の救済に含まれている。サウスエンド・ユナイテッドはディヴィジョン 1 在籍シーズンを 71 シーズンにすべく、ディヴィジョン 3 から昇格した。F L から降格していたダーリントンは、昇格を勝ち取って F L に帰ってきた。

( 中略 ) 独立した P L を具体化するシステムは、1 の野心と、9 にあたるその他の人々が一方でケーキのくずを拾うという恐怖によって形成されており、哀れな選択のように見えるものであり、イングランドのスポーツたるフットボールの大部分 ( クラブチーム、監督、選手、ファン ) は望んでいない。

P L の設立過程において、F A とビッグクラブは彼ら自身の名をマネジメント機関に連ねていた。しかし、現在、F A は P L における 22 クラブチームの会長が代表者による運営について会議を行なっている。

過去の経験において、こうした状態は協調性を持ったハーモニーの秘訣にはほとんどならない。F A の最高責任者であるグレアム・ケリーが、アラビアのロレンスのラストシーンにおいて反目しあう首長に囲まれてタンブリッジ・ウェルズに残ることをはっきりと願うイギリス人大使のようになることは想像に難くない。

(15)

この記事の中でレイシーは、観客動員数とフットボールへの注目度の回復を例にあげてイングランド・フットボールにおける熱気が戻りつつある状況を記した後、性急なビジネスマインドの導入によって拡大するであろうトップクラブと他のクラブチームとの経済的な格差への危惧、継続的な努力よりもキャッチーな事件を書きたてた近年のフットボール・ジャーナリズムに対する批判、P Lを「1の野心と、9にあたるその他の人々が一方でケーキのくずを拾うという恐怖」という向こう見ずなシステムの上に成り立つものとした酷評を次々と綴っている。

P Lの設立に対して批判的な記事が多いガーディアンにあって、本記事はもっとも長い記事となっているが、中でも注目したい箇所は最初の段落における記述である。レイシーは商業主義の波によって「フットボールの中にある何か大切なもの」が失われるとしている。また、「ビデオはラジオスターを殺し、そしてテレビ契約はF Lにもたらされない」という文章では「ラジオスターの悲劇（原題は"Video killed the radio star"）」というヒットナンバーにかけて、F Lという旧来からのシステムがP Lの台頭によって淘汰される様子を表現している。いずれの文章にも比喩表現が用いられているが、その内実で表わされているものとは、フットボール・ファンが持つ「古き良きフットボールへの郷愁」のようなものではないだろうか。イングランド・フットボール界における歴史の堆積物が荒波に吞まれていこうとしている1991年当時のフットボール・ファンの心情のひとつを、レイシーはこの段落において提示していると見ることができるだろう。

### 3. まとめ

8月22日付タイムズの「Law Reports」でも述べられていたように、判決において「F Aは再審理の対象ではない」という要因を以て決着がついたことは、F LやP Lを望まない人々にとって歯切れの悪いものと感じられたに違いない。とはいえ、裁判においてF Lによる訴えが三つの項目すべてにおいて退けられたことは、紛れもない事実である。

それにもかかわらず、判決後における新聞各紙に掲載されていた記事の論調は、その多くがP Lの設立に対して冷ややかなものであった。紙面上において、P Lの設立を全面的に支持するのは「ビッグ5」とF Aの関係者のみであり、短期的なビジネスマインドへの批判の声やフットボールの将来を見据えた長期的な視野の重要性などを反映した記事、国民的スポーツとしてのフットボールについての一般大衆による意見が大勢を占めていたのである。

このことから、テレビ放映権料収入の増額などによって経済的な改善が図られる可能性が極めて高く、なおかつ司法の場において是認を受けていたにもかかわらず、P Lの設立への支持がかならずしも大きいものではなかった当時の状況を見て取ることができる。

## 終章

### 1. おわりに



第二章において扱った1991年7月の裁判における争点は、あくまでFAによるPLの設立に関連した三つの項目についてである。しかし、公聴期間もしくは判決後における各方面からの反応を考察した結果、この裁判が訴状の是非を明らかにするという法廷内における論争のみにとどまらず、イングランド・フットボール界がその歴史と現状を受けた上で、将来的にどのような道を進むべきなのかという問題意識を内包していることを窺い知ることができた。

中世において、フットボールのプレイヤーは庶民であり、各地域の有力者は民俗フットボールを庇護する立場でしかなかった。その後一旦、フットボールは限られた上流階級出身者を中心として紳士教育やスポーツマンシップの指導といった意味合いにおいて発展したが、ルールの統一や交通網の発展によるクラブシーンの拡大を経て、フットボールは再び一般大衆によってプレーされることとなり、また多くの人々によって観戦されるようになった。その後100年以上にわたって、庶民の間においてフットボール文化は発展していった。そんな折、エリート主義、商業主義の名のもとにフットボールが一般大衆の手から遠のこうとしていた。

イングランドで発祥したスポーツの中でも特に、フットボールはもともと文化的および生活的な空間をフィールドとしてきた。しかし1991年当時、フィールド内ではテラスの撤廃と全座席化による消費空間化が推進され、フィールド外では強者の主導による強者のためのマネーゲームが展開されようとしていた。押し寄せる商業主義の波は、1世紀以上の時間をかけて堆積されたイングランド・フットボールの独自性をさらおうとしていたのである。

PLの設立や1991年7月の裁判、そして裁判に関連する議論の数々とは、イングランド・フットボールにおける担い手の変遷史上の伝統と革新とのせめぎ合いの場であり、それ故にイングランド・フットボールの歴史上において注視する価値のある出来事だったのである。それ以前におけるイングランド・フットボールの歴史を振り返ることをせずにこの時代における単体の事象として捉えた場合、あるいはPLの設立後における商業的な成功のみに目を向けた場合において、その意味を十分に理解することができない出来事であると言えることができるだろう。そして、その意味をより理解する上で、歴史的な視点は欠かすことのできないものなのである。

## 序章

- (1)池田好優ら、[7]、p239
- (2)池田ら、[8]、p159
- (3)池田ら、[9]、p41,48
- (4)飯田義明、[6]、p8
- (5)吉田竜司、[20]、p123~133

## 第一章

- (1)池田ら、[7]、p239
- (2)アルフレッド・ヴァール、[13]、p17
- (3)山本浩、[19]、p35
- (4)阿部生雄、[12]、p35
- (5)後藤健生、[16]、p51~52
- (6)阿部、[12]、p36
- (7)池田ら、[7]、p241
- (8)阿部、[12]、p36,38
- (9)池田ら、[7]、p241~242
- (10)後藤、[17]、p181
- (11)山本、[19]、p72
- (12)山本、[19]、p71~73
- (13)ヴァール、[13]、p19
- (14)山本、[19]、p73,74,76,77
- (15)山本、[19]、p68
- (16)ヴァール、[13]、p20~21
- (17)後藤、[16]、p52
- (18)山本、[19]、p130
- (19)山本、[19]、p133
- (20)山本、[19]、p134~135
- (21)山本、[19]、p133,134
- (22)山本、[19]、p136
- (23)後藤、[17]、p183
- (24)山本、[19]、p136~138
- (25)山本、[19]、p138
- (26)後藤、[17]、p184
- (27)山本、[19]、p143

- (28)山本、[19]、 p143~144
- (29)山本、[19]、 p144~146
- (30)山本、[19]、 p148
- (31)ヴァール、[13]、 p21
- (32)ヴァール、[13]、 p22~29
- (33)後藤、[17]、 p187~188
- (34)トニー・メイソン、[18]、 p136~137
- (35)後藤、[17]、 p188
- (36)阿部、[12]、 p51
- (37)ヴァール、[13]、 p30
- (38)阿部、[12]、 p51
- (39)阿部、[12]、 p51
- (40)後藤、[17]、 p189
- (41)メイソン、[18]、 p139~140
- (42)後藤、[17]、 p189
- (43)ヴァール、[13]、 p32
- (44)阿部、[12]、 p51~52
- (45)ヴァール、[13]、 p52
- (46)ヴァール、[13]、 p52
- (47)池田ら、[7]、 p242
- (48)池田ら、[7]、 p242
- (49)月嶋紘之、[10]、 p4
- (50)池田ら、[7]、 p246
- (51)飯田、[6]、 p9
- (52)池田ら、[7]、 p243
- (53)池田ら、[7]、 p246
- (54)池田ら、[7]、 p245
- (55)月嶋、[10]、 p4~5
- (56)池田ら、[8]、 p161~162
- (57)池田ら、[9]、 p42
- (58)後藤、[16]、 p47~48
- (59)池田ら、[9]、 p43
- (60)池田ら、[9]、 p42
- (61)池田ら、[9]、 p42~43
- (62)池田ら、[9]、 p43
- (63)月嶋、[10]、 p6

- (64)吉田、[11]、 p252
- (65)後藤、[16]、 p48
- (66)飯田、[6]、 p10
- (67)吉田、[20]、 p126
- (68)後藤、[17]、 p246
- (69)吉田、[11]、 p253
- (70)飯田、[6]、 p11
- (71)吉田、[20]、 p123~124
- (72)飯田、[6]、 p11
- (73)吉田、[20]、 p125
- (74)吉田、[11]、 p254~255
- (75)飯田、[6]、 p11
- (76)月嶋、[10]、 p3
- (77)吉田、[11]、 p255~256
- (78)吉田、[11]、 p256~257

## 第二章

- (1)[4]
- (2)[1]、 p36 July 23 1991
- (3)[2]、 p16 July 23 1991
- (4)[3]、 p28 July 23 1991
- (5)[1]、 p36 July 24 1991
- (6)[1]、 p35 July 25 1991
- (7)[2]、 p14 July 26 1991
- (8)[1]、 p34 August 1 1991
- (9)[2]、 p14 August 1 1991
- (10)[2]、 p14 August 9 1991
- (11)[1]、 p36 August 2 1991
- (12)[1]、 p36 August 2 1991
- (13)[1]、 p34 August 7 1991
- (14)[1]、 p30 August 8 1991
- (15)[2]、 p14 August 13 1991
- (16)[1]、 p27 August 22 1991
- (17)[3]、 p36 August 16 1991

## 参考文献一覧

- [1]The Times
- [2]The Guardian
- [3]Daily Mirror
- [4]R v Football Association Ltd, ex parte Football League Ltd; Football League Ltd v Football Association Ltd [1993] 2 All ER 833
- [5]The RT Hon Lord Justice Taylor, The Hillsborough Stadium Disaster 15 April 1989: Final Report, Her Majesty's Stationary Office 1990.1
- [6]飯田義明、「イングランドにおけるプロ・サッカークラブのスタジアム変容に関する一考察」  
専修大学 専修大学体育研究紀要 第29号 2005年10月
- [7]池田好優 入口豊 芝田孝人 中野尊志 宝学淳郎、「英国におけるサッカー・フーリガニズムに関する研究( ) サッカー・フーリガニズムの起源と歴史」  
大阪体育大学 大阪体育大学紀要 第 部門 第41巻 第2号 1993年2月
- [8]池田好優 入口豊 芝田孝人 中野尊志 宝学淳郎、「英国におけるサッカー・フーリガニズムに関する研究( ) サッカー・フーリガニズム拡大の背景」  
大阪体育大学 大阪体育大学紀要 第 部門 第42巻 第1号 1993年9月
- [9]入口豊 池田好優 中野尊志 宝学淳郎 芝田孝人、「英国におけるサッカー・フーリガニズムに関する研究( ) 二つの惨事とテイラー・レポートについて」  
大阪体育大学 大阪体育大学紀要 第 部門 第44巻 第1号 1995年9月
- [10]月嶋紘之、「イングランドにおける『フットボール観客法1989』の成立に関する一考察 『フーリガン』を巡る『法的暴力』の実態」  
スポーツ史学会 スポーツ史研究 第21号 2008年
- [11]吉田竜司、「全座席化と消費空間化 イギリスのサッカー観戦環境をめぐる国家と市場の結合」  
龍谷大学 龍谷大学国際社会文化研究所紀要 第9号 2007年5月
- [12]阿部生雄、「近代スポーツマンシップの誕生と成長」  
筑波大学出版会 2009年1月
- [13]アルフレッド・ヴァール、遠藤ゆかり(訳) 大住良之(監修)、「サッカーの歴史」  
創元社 2002年1月
- [14]アレン・グットマン、谷川稔(訳) 池田恵子(訳) 石井昌幸(訳) 石井芳枝(訳)  
「スポーツと帝国 近代スポーツと文化帝国主義」  
昭和堂 1997年8月
- [15]クリストファー・ヒルトン、野間けい子(訳)、「欧州サッカーのすべて(3<sup>rd</sup> edition)」  
大栄出版 2002年3月
- [16]後藤健生、「世界サッカー紀行」

文藝春秋 1997年

[17]後藤健生、「ヨーロッパ・サッカーの源流へ プレミア・セリエA・フランスリーグ  
取材ノートから 」

双葉社 2000年9月

[18]トニー・メイソン、松村高夫（訳） 山内文明（訳）「英国スポーツの文化」

同文館 1991年5月

[19]山本浩、「フットボールの文化史」

ちくま新書 1998年4月

[20]吉田竜司、「DOING SOCIOLOGY テラスから 変貌するイギリスのサッ  
カー観戦環境」

社会学研究会 ソシオロジ 第50巻1号（通巻153号） 2005年5月